
異世界チェンジリング

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界チェンジリング

【Nコード】

N5674W

【作者名】

空月

【あらすじ】

悲痛な声に導かれ、目覚めれば知らない天井が。いかにもファンタジーなこの身体、明らかに自分のじゃないんだけど…って、エルフ？しかも無性体？なんか色々面倒な事情があるみたいだけど、とりあえず旅に出ないといけないらしい。魔法使いと勇者＋ が幼馴染だとか、いったいどこのRPGですか？

ワケありでハイスペックな魔法使いの身体に憑依トリップ（もどき）した拳句、身体の持ち主の幼馴染と『魔王』を倒すための旅

に出たり何やらややこしい事情に強制的に巻き込まれちゃったりする、平凡だったはずの女の子の物語。

別所にて連載中のものの転載です。厳密にはボーイズラブ要素はありませんが、設定上それに近いものが感じられるかもしれません。

前夜

もう、時間がない。

己の身体に刻まれた忌わしき印を見遣り、嘆息する。闇夜でも煌く銀髪がさらりと肩を滑った。

衣服の裕を元通りにし、静かに立ち上がる。

チャンスは一度。失敗すれば、二度とこの術を使うことは出来ないだろう。そうして無慈悲な運命の輪が廻るのだ。

深く、息を吐いた。指を宙に滑らせると、その軌跡が淡い青の光となって残る。

脳裏に鮮明に在る魔法陣を、寸分の狂いもなく指先で辿る。

これが自分に許された最後の賭けだと知っているから、祈るような気持ちでひたすらに陣を描いた。

そうして最後の連結を成した瞬間、魔法陣は質量を持たない図形から、世界と世界を繋ぐ『門』へと変化し。

決して交わるはずのない世界が、繋がった。

邂逅

すまない、と誰かが囁いた。

それはそれは悲痛な声で、聞いてるだけの私ですら妙に胸が痛くなるような、悲哀に満ちた声だった。

『謝って許されることではないのは分かっている。けれど私には他に成す術がない。』

住み慣れた地を離れることがどれほどに辛いかわ、君を慈しむ者達から君を引き離すことがどれほどに罪深いか、それを分かっている。尚、私はこの手段を選んだ。

出来る限りのことはしたつもりだ。それでも足りないことは分かっている。けれどももう猶予はないのだ。

すまない。……本当に、すまない』

……いやなんかよくわかんないけど、そんな今にも罪悪感とかで死にそうになるほどじゃないと思うよ。のっぴきならない理由があるんだらうって言うのは何となく分かるし。

とりあえず衣食住が何とかなれば、人間には適応能力とか順応性とかあるし、住めば都ってという言葉もあることだし、多分大丈夫だよ。根拠ないけど。

『君は、優しい。その優しさを私は利用しようとしている。』

…… 幾らでも罵ってくれて構わない。全ては私と、私の種族の罪だ。本来なら関わることなく生を終えるはずだった君を巻き込んだ責は負おう。

お願いだ。見捨てないでくれ、私の世界を』

えええ、いきなり世界とかグローバルなもの出されても困るよ！
こっちは平凡な小市民だよ！？

あ、でも小心者だから罵るとかしないから。っていうか種族って何。まさか人間じゃないんですかあなた。

深い深い、青色の 悔恨を秘めた深海の瞳と、銀色の髪、が。
私の意識に灼きついて、そうしてひとこと。

『チエンジリング』

それが、全ての始まりだった。

はじまりの日

目が覚めたら、知らない天井が見えた。

「ッ!?!」

一気に覚醒して身体を起こす。……って、なんか節々が痛い。怪訝に思って自分の身体を見下ろして、さらに驚いた。

「なに、この服……」

私はいつも通り、パジャマに着替えて寝たはずだ。間違っても裾がひらひらで且つあちこちに細かい刺繍が入ってる。いかにもフアンタジーでコスプレチックな服を着た覚えはない。

というか私は床に寝ていたらしい。道理で身体が痛いわけだ。…あれ?」

視界の端を掠めた銀色に、思考が止まった。それはさらりと肩を滑り、胸に落ちてくる。いやいや、ちょっと待ってこれはもしかして。

……髪の毛、毛?

いやいやいやそんなはずは。私髪染めたり脱色したりしてないし。もし染めるとしても銀髪なんて難易度高いのに挑戦したりしない。一歩間違えば白髪じゃないか。

とりあえずその銀色の束を引っ張ってみた。……頭皮が引き攣れる特有の痛みが襲ってくる。思い切り引っ張ったのでちょっと涙目になった。

マジですか。

夢だったりしないだろうかと思いつながら自分が寝ていたららしい部屋を見回す。鏡っぽいものを見つけて、それに駆け寄った。

それに映し出されたのは。

「誰これ……」

胸の中ほどまでの長さの銀髪に、深い青色の瞳。いっそ幻想的なまでの白い肌。初対面だったら「何この美形。神様気合入れすぎ」
とも思いそうなほど整った顔。

そして極めつけは、銀髪の隙間から覗く尖った耳。

ファンタジー小説、もしくはRPGにでも出てきそうなその外見に、私の思考は今度こそ停止した。

けれど幸か不幸か、その瞬間に闖入者は現れた。

「おい、シーファア？」

どンドン、と扉を叩く音。我に返った私が音の発生源の方を見ると、その扉が開くのは同時だった。

「ああ、起きてるじゃないか。返事位しろ」

現れたのは金髪碧眼のいかにもな西洋風美形だった。っていうか誰。

「？ どうした。目え開けたまま寝てるとかか？」

反応を示さない私に不思議そうな目線を向けながら、その人はずかずかと部屋に上がりこんで近づいてくる。

「シーファア？」

それが自分に向けられた呼びかけだと気付くのに数秒かった。
馴染みのない名前　けれど私は『知っていた』。

シーファ・イザン。それがこの身体の名前だと。

そう認識した瞬間のことを、どう表せばいいだろう。

知らないはずの記憶、知らないはずの知識、そういうものが奔流のように頭の中に溢れ出てきて、何もかも　『私』そのものが一瞬喪失される感覚。

その感覚から解放され、そうして目の前の人物を認識して私は言葉を零した。

「レアルード……？」

「なんだ？」

知らないはずの人、なのに。私は彼の名を知っていた。間違いない異常事態に見舞われていることに、今更ながら愕然とする。

そんな私の顔を覗き込む男　『レアルード』。

「具合でも悪いのか？　なんか変だぞ」

前半は見当違いだけど、後半は当たり前だ。だって私はレアルードの知る『シーファ』じゃない。

恐らくは、いや、『シーファ』の記憶からすると確実に、『異世界』の人間である私の精神が『シーファ』の中に入っているのだ。……というか、入れ替わったとでも言うべきか。

まだ記憶が馴染まないためなのか、それとも別の理由があるのか知らないが、所々不明な部分はあるが、私は、起きる前に聞いた悲痛な『声』の主　シーファと精神を交換する形でこの世界に来たらしい。シーファが何故そんなことをしたのかは分からないが、どうすれば帰ることが出来るのかはわかっている　シーファの『記憶』が教えてくれる。

私はそのためにどう行動すべきかを数秒で判断し、口を開いた。

「………すまない。少し、ぼうつとしてしまったようだ」

「疲れてるのか？ 今日出発できるか？」

「ああ。………大丈夫だ」

頷いて、立ち上がる。基本的に着物みたいなつくりの服だけじゃなんだか心許なくて（だってこの服結構薄い）近くにかけてあった、これまたひらひらしてる上着を羽織った。

「準備は出来ている。だが少し待っていてくれ。私は起きたばかりなんだ」

「外出ておいたほうが良いか？」

「出来ればそうしてもらえると助かる」

「わかった」

言葉と共にリアルードが外に出て行く。それを見届けて、私は大きく溜息を吐いた。

「……どうしよう」

いや、どうするべきなのかというか、これからの行動指針に関しては分かっているんだけど。

この世界には『魔王』がいるらしい。

……ありえない、と思うけど、異世界だからとりあえず納得しておく。

それで、どうやら『シーファ』は魔王を退治しに行くパーティの一人だったようだ。そしてリアルードもその一人。ゲームとかで言うところの勇者がリアルード、初期メンバーの魔法使いがシーファ、みたいなポジションっぽい。

『魔王』を倒せば元の世界に帰れるのだと、『シーファ』の記憶が告げている。私とシーファの精神を交換する術は、『魔王』を倒すことで解除されるらしい。

『シーファ』の記憶によれば、今日が魔王を倒す旅に出る日で、それ故にリアルードが朝から尋ねてきたということなのかな。……

え、わざわざこの家に？

『シーファ』の記憶と照合して疑問が浮かぶ。だってこの家、レアルードとか他の人とかが住んでいる場所から結構離れた場所、もつと言えば森の中にある。なのにこんな朝っぱらからわざわざ？

それはちょっとおかしくないか？

まあ、パーティがシーファとレアルードだけならまだ分かる。面倒見いい人だなーで済ませられる。でも『シーファ』の記憶から得た知識だと、出発時のメンバーは三人なのだ。

私と、^{シーファ}レアルードと、えーと……あれ、名前何だろう。『シーファ』の記憶は私にとって元々のものではないから、『思い出す』という工程になにか不具合でもあるのか、上手く記憶を検索できないのだ。

まあその内思い出せる（この表現が的確かどうかは置いて）だろうから、とりあえずそれはいいとして。

自分の身体を見下ろす。全てが見慣れない。視線の高さも違う。声も違う。身体のラインも。

……あれ？

ぺた、と自分の胸に手を押し当てる。……平べったかった。

一度深呼吸してもう一度確かめる。……やっぱり平べったかった。

……え？

もしかして、『シーファ』って。

即座に閃いた嫌な予感を振り切るように『シーファ』の記憶を辿る。

いやいやいや、百歩譲って身体の交換はいいけど、性転換だけは勘弁……！

ほぼ半泣きで記憶を探る。触って確かめるとか無理。嫌過ぎる。下半身を意識するのも同様の理由で却下だ。

そしてなんとか望んだ記憶を引っ張り出したわけだけど……。

「む、無性体……！？」

思わず床に膝と手をついてうなだれたい衝動に駆られた。やらないけど。

いや、男よりはいいけど……いいけど、無性体って……。
上もないけど下もないってことだね。……は、排泄器官とかどうなってるんだろう。日常に密接しすぎて意識しないと記憶（っというか知識？）が出てこないんだけど。

……まあ、ここで私が何を思おうと事實は変わらないから、この辺のことはありのままに受け止めよう。男性体じゃなかったただけマシだ。

というかあんまり遅いとレアルードがまた突入してくるかもしれない。

シーファが用意しておいた（と記憶が告げている）荷物を手に取る。……異様に軽いんだけど。ちゃんと旅の用意できてるんだろう

か。

ちょっと不安になって中を見てみようかと思ったところで、外からリアルードが大声で呼びかけてきた。ああもう、もうちょっとくらいゆっくりさせてくれないかな……！ 一応私いきなりこの世界に連れて来られたばかりなんだけど！

そんなことリアルードが知るわけもないので、仕方なく扉に向かう。

あ、ちなみに荷物が異様に軽い理由はほぼ四次元ポケットだからだった。そういう『記憶』があった。

でも、つい耳のない猫型ロボットを連想した私を誰も責められないと思う。……実際は魔法の恩恵らしいけど、四次元ポケットって言ったら、ねえ？

はじまりの日・2

とりあえず滞りなく魔王を倒す旅に出ることが出来た。

ちなみに思い出せなかった旅の仲間三人目はピアという名前の女の子だった。ウェーブのかかった栗色の髪と新緑のような瞳を持つ、可愛らしい、だけどちょっと気が強い感じの女の子。なんだか私：シーフアに対して当たりがきついのが玉に瑕だ。

武器は弓。後方支援二人に前衛一人って言うのははたしてバランス的にどうなんだろうかと思わなくも無いけど、どうやらリアルードはかなり強いようなので大丈夫だろう。

よくあるRPGの王道っぽく、まずはちょっと離れた村だけ町だかを目指すらしい。そして今現在はその道行きの途中なのだけだ。

……………なんだろうこの空気の悪さ……………！

「リリースの町まではあと一時間くらいだ。このまま休まず行くつもりだけど、大丈夫か？ 朝も様子がおかしかったし……………」

心配だ、と言う感情を顔全体で表しながら、リアルードが話しかけてくる。それに当たり障りの無い言葉を返しながら、斜め後ろから感じるどう考えても好意的ではない視線について考える。

その視線の持ち主はもちろん私^{シーフア}ではないし、リアルードでもない。

ごく簡単な消去法で導き出される結論は、私に内心で首を傾げさせるには充分だ。

シーファの記憶の中に、ピアの情報は殆ど無い。それはつまりところ、ピアとシーファの関わりがあまりなかったことを示す。

シーファの記憶を探ってみても、彼女と会話したのは両の手で足りる程度の回数だった。シーファはあの森の中の家にはほぼ引きこもっていたのだから。

そんなシーファにやたらと会いに来ていたのがレアルードで、どう考えても人好きがするとは言えないシーファに対しても嬉々として話しかけ、外に連れ出し、時には家に泊まり込み　そんなレアルードを、シーファは意外と気に入っていたようだ。故に邪険にすることも無く、それなりに仲も良かった、と記憶が告げている。

そしてここからは私の推測なのだけど、ピアはレアルードのことが好きなんじゃないかと思う。なんか私に向けられてる感情って嫉妬っぽいし。

なんで私に嫉妬シーファなんてするのは疑問だけど。

だってシーファは無性体だけど、どうやら対外的には男で通していたらしいのだ。まあ、胸がない　貧乳とか言っごまかすのも無理なくらい真っ平らなのだから、女と偽るより男と偽る方が簡単だったのだろう。

どうやらこの世界に無性の人型種族はいないようだし、そもそもシーファはエルフ（この世界においては伝説上の人型種族で、まあ概ねゲームとか漫画とかに出てくる『エルフ』のイメージで合ってるっぽい）であることも隠しているのだ。

とにかく人間外であることをひた隠しにしていたようなので、男であると思われたところで特に問題もないし、誤解を放置していた

のだろう。

ともかくもレアルードやらピアにとって『男』であるはずの私を、^{シーファ}何がどうして恋愛的な嫉妬対象として見る事が出来るのだろうか、ピアは。

まさかレアルードが男色家であるわけもあるまいし。……え、ない、よね？

ちよっぴり不安になりつつも、さらに考えをめぐらす。実際のところ、ピアが嫉妬を向けてくる理由が全く予想できないわけじゃない。しかし、恐らくは理由の大部分を占めるだろう問題は、私にはどうしようもない部類のものだ。

まあいいかと考えを打ち切る。ぎすぎすした雰囲気はちよつと、いやかなり精神に負担がかかるだろうし、視線が気になって仕方がないけど、そのうちどうにかなるだろう。別にシーファとレアルードは特別な関係というわけじゃないのだから。

もしかしたらレアルードとピアが恋人同士になるなんてことがないとも限らない。RPGのお約束的にも有り得そうだし。なんていっただって初期パーティーメンバー（仮）だ。

でもそうなる^{シーファ}と私がお邪魔虫になるなあ。新しいパーティーメンバー早く増えないだろうか。

そんなことを考えつつ、そして度々声をかけてくるレアルードに
適当な言葉を返しつつ、歩を進める。

っていつかレアルード、私に^{シーファ}ばっか声かけてないでピアも気にかけてあげなよ！ 女の子なんだし！

……いや、こうもレアルードが心配してくる理由は分かっている。

私が転ぶからだ。

いや別に、私がドジっ子なわけじゃないよ！？

考えてみればすごく単純なことだけど、どうしようもない 恐らく『出来る限りのことをし』てくれたシーファにも、どうすることもできない問題があったただけのこと。

『私』と『シーファ』のリーチが違うのだ。というか全体的に違いすぎる。

『私』よりも長い手足、エルフだからなのかはわからないけれど鋭すぎる五感、すべてが強烈な違和感として私の感覚を混乱させる。普通に歩こうとすれば長さの違いでつんのめるし、耳が良すぎて音がごちゃごちゃして気持ち悪いし……挙げればキリがないほどの違和感のせいで、顔色悪いし声に力ないしふらふらしてるし時々転びかけるといって、到底元氣そうには見えない、色々な意味で『様子のおかしい』シーファが出来上がってしまったわけだ。

だからリアルードは私が具合悪いんじゃないかとかなんか無理してるんじゃないかとか思っ、気にかけてくれているんだろう。多分。

だけどこればかりは慣れるしかない。理由言えないし、実践で慣れるのが手っ取り早いだろうし。

まあ、体調悪いんだという風に誤解してるみたいだから都合がいい。多少変な言動しても誤魔化されてくれそうだ。

……ああ、でも私を気にかけるくらいならピアを気にかけてあげ

てくれないかな本当。

善意なのはわかるけど、ただでさえ気を張ってないといけないのに心配そうな目で絶え間なく見られるのはちよつと精神的にキツイ……！

何の苦行だろうと言いたくなるような時間を経て、第一の目的地だった『リリスの町』とやらに着いた。

『町』というだけあって、レアルード達が暮らしていた村よりも大きいし、道も整備されている。石造りの建物と木造りの建物が混在していて、やっぱりどこかファンタジーっぽい。

普段だったら絶対におのぼりさんの如くきよるきよるうるうるする自信があるけど、今現在の体調と状況的にそうできなかったのは良かったのか悪かったのか。

既に限界ギリギリだった私を見兼ねてか、ものすごく迅速にレアルードが宿をとってきてくれた。

ピアの視線が痛いけどものすごく有難いよレアルード……！ 今ならハグで感謝を表したって良い。……いや、単にそろそろ歩くの辛いです。寄りかかりたい。でもピアが怖いからやらないでおく。

幽霊さながらな感じでふらふらと宿に向かう。よつぽど死にそうな顔色だったのか、途中でレアルードが肩を貸してくれた。視線に殺傷能力があったら十回くらい惨殺されてそうな視線をピアから受けたけど、拒否できるほどの余裕はもうなかったので厚意に甘えさ

せてもらった。

っていうかありえないよこの頭痛と吐き気。鋭敏すぎる五感には早く慣れないとまずそうだ。正直ここまで影響が出るとは思わなかった。

辿り着いた宿の一室でベッドに寝転がる。なおも心配そうなレアルドと射殺しそうな視線を放つピアをなんとか言いくるめて部屋から追い出し、溜息を吐く。

目を閉じてすぐに、夢に落ちた。

目の前に鏡があつた。そこにはすごく申し訳なさそうな顔をした『シーファ』が映っていて、彼は口を開いて何か言う。けどその言葉は聞こえなくて、私は首を傾げた。

しばらく何かを言い続けていたシーファは諦めたように首を振る。そしてシーファが空中に魔法陣みたいなのを書いて、それがふわりと私の方に移動してきて。

ちょうど私の心臓の真上に触れたところで、目が覚めた。

「変な夢……」

呟いて、どのくらい眠っていたのだろうと窓の外を見る。町に着いたときはちょうどお昼時だったはずだから、多分一時間も経って

いないだろう。多分レアルードとピアはご飯でも食べてるだろうし、もう少しこうしていよう。

……あ、でもこれ一応旅装なんだから着替えた方がいいのかな。なんか部屋着的なものくらい荷物の中にあるだろうし。

ベッドから降りて荷物を探る。難なく見つかった部屋着っぽいものに着替えようと袷を解いて、目に入ったものの異様さに凍りついた。

殆ど上半身全体に及ぶ、全体像を把握できない複雑な文様。そして心臓の真上に、それより小さな、夢で見たのと同じ魔法陣らしきものがあった。

「なに、これ……」

指先で辿ってみてもそこにはただ肌の質感があるだけで、それがむしろ異様さを際立たせていた。

大きい方の文様 恐らくはこちらも魔法陣のような形状なのだろう。は黒色で、だけどうつすらと赤く発光していた。小さな魔法陣の方は淡く青色に光っている。

青色の魔法陣はしばらく鼓動に合わせてるように明滅していたけど、じっと見ている間にすうつと身体に溶けるように消えた。同時に黒色の文様の発光もおさまる。

気付けば眠る前まで感じていた違和感の全てが跡形もなく消えていて、頭痛と吐き気も感じなくなっていた。

それが青色の魔法陣のおかげだということは何となく分かったので、とりあえず裕を元に戻す。そしてしばらく悩んだ後に、少し外に出てみることにした。

まだレアルード達が帰ってくる様子はないし、一応書き置きでもしておけばいいだろう。それに色々確かめたいこともある。

荷物の中にあつたメモ用紙っぽいものに少し出かけてくる旨を書き綴り、部屋に備え付けらしいテーブルの上に載せて、荷物を持って宿を出た。

ちなみに、この世界の文字は私が知っているどの言語とも違うものだった。とりあえず絶対に日本語ではない。だけど、誰かに伝える目的で文字を書こうとすると手が勝手にこの世界の言語に置き換えて書いてくれるので、伝わらないということはないだろう。

『シーファ』が何かしてくれたんだと思うけど、自分の意思の外で手が文字を綴るのは、ちょっと気味悪かった。便利だけど。

第一次接近遭遇

シーファの使う『魔法』は、『世界干渉力』によって発動する。

『世界干渉力』が一体何なのかは私にはさっぱりわからないのだが、とりあえずその名の通りの代物であるらしい。

『世界』に対して『干渉』する力。例えば火種も道具も何もない状態で、灯りのための火をおこそうとしても無理だけど、その『無理』を『世界』を変化させることによって実現させる力、だと思う。灯りの例で言えば、そこに炎があるのだと『世界』に認識させることによって炎を生み出す、みたいなの。

まあ、まだわからない部分が多い。『シーファ』の記憶だけでは心許ないので、実地でその辺は理解しようと思ったのだけど。

「えーと、とりあえず……『呪』と『魔法陣』があると、制御しやすいのかな」

確認するようにひとりごちて、極めて初歩的な『呪』と『魔法陣』を記憶から探る。

炎とか水とか氷とか風とか、RPGで見るような属性持ちの攻撃は一通りあるようだ。もちろん回復系統とか防御系統のものもある。

少し悩んでから、まずは攻撃魔法を試してみることにする。これから『魔王』を倒しに行くのだし、どういふものか知っておかない

とまずいだらう。

宿の裏手の空き地っぽいところにとりあえず来てみたのだけど、うっかり人に見られても困るので、『シーファ』の記憶にあった『結界』を張ってみようと決めた。近くに生えていた木の幹に荷物の中であつた札らしきものを貼って、そこに『世界干渉力』を浸透させる。

途端、遠く聞こえていた喧騒や人の話し声がぷつりと途切れた。どうやら『結界』を張るのに成功したようだ。

よし、と気合を入れなおして、私は『シーファ』の記憶にある『魔法』を簡単なものから実践し始めた。

眼前に広がる巨大な氷の壁　否、氷の盾を消滅させて、私は溜息を吐いた。

「一体いくつあるんだらう、魔法……」

周囲に被害を及ぼさないように、宙に向かって攻撃を放つてみたり、防御系の魔法を展開してそれに攻撃魔法を当ててみたり、身体補助系の魔法を自分にかけてからその効果を確かめてみたり……各系統ごとでも両手じゃ足りないくらいの魔法を試したはずなのに、『シーファ』の記憶からは次から次へと『魔法』が出てくる。

流石に広範囲系の魔法は怖いので試していないのだけど、『シーファ』はなんでこんなに多くの魔法を知ってるんだらう。

『魔法』ってそこまで一般的なものじゃないみたいだし、『魔法

全集』的な本があるわけでもない。

……自分で作ったとかだろうか。そういうことが出来るのかは知らないけど。

『シーファ』にとってこれらの魔法を知っていることは『当然』であるらしいので、まあ、理由を知らなくてもそこまで困ったことにはならないだろう。その内分かるときが来るかもしれないし。

あんまり長々とここで『魔法』について確認しているわけにもいかない。正確な時間はわからないけど、そろそろレアルード達が帰ってきてもおかしくない時間だろう。一応書き置きはしてきてるけど、なんかレアルードって心配性っぽい気がするからなあ。

とか何とか考えて、最後に回復系統の魔法を試してみようと『記憶』を探った。

回復系も他の魔法と同じで、範囲とか威力で段階が分かれている。……違うな、分かれているというよりも、その方が使うのに便利だからそうしてるっぽい。とりあえず使いやすいように区切りをつけておいてるみたいない……上手く言えないけど。

まあとにかく、威力も範囲も中程度の回復系魔法を『記憶』から引っ張り出して、私はそれを発動させるための魔法陣を宙に描いた。『記憶』の中の魔法陣を想起すれば、指先は独りでにその図形を生み出す。自分の意思の外で身体が動く現象には、多分もう慣れるしかないんだろう。

……やっぱり気味悪い、ていうか気持ち悪いけど。

別に魔法陣を描かなくてもいいんだけど、暫くは魔法陣と呪ありで魔法を使うことにしようと思ってる。まあ、そうする余裕があるときに限るだろうとは思っけど。

だって切羽詰つてるときにいちいち魔法陣とか描いてられない。魔法陣を自分で描かずそのまま出現させることも出来るらしいから、そっちもその内やってみよう。

ぼんやりそんなことを思ってる間に魔法陣を描き終わったので、呪を紡ぐために小さく口を開いた。

『呪』は明確に決まってるわけではなく（まあそう言ったら『魔法陣』も絶対的な形状があるわけじゃないみたいだけど）、『私』がそれをその『魔法』が発動するためのキーみたいなものだとは認識していればそれでいいらしい。

『シーフア』の『呪』ももちろんあったんだけど、なんかちよつと……『私』が口にするのは難しいというか恥ずかしいというか、……いかにも『魔法使い』な『呪』だったのだ。

だから別に『呪』を決めることにしたのだけど、ある程度それっぽくて、且つあんまり恥ずかしくない『呪』という結構限られてくるわけで。自分のセンスに絶望的な気分になるけど、これはもう仕方ないと思う。

「 『ヒール』 」

呟けば、宙に浮いていた魔法陣が一瞬で光の粒子に変化し、ぱつと周囲に拡散した。次いで私を中心として地面に巨大な魔法陣が現れる。

大きさは空き地（？）より少し小さい程度だ。魔法陣の範囲が魔法の効果範囲だろうから、結構範囲が広い気がする。

……それにしても、果たしてこの視覚効果は何か意味があるんだ

ろうか。RPG的エフェクトにも程がある。最初から大きい魔法陣が展開すればいいと思うんだよね。せめて光の粒子っぽいエフェクトがなければ発動までの時間短縮にもなると思うんだけど。

そんなどうでもよさそうなことを考えていたからだろうか、回復系の魔法 便宜上『ヒール』と呼ぶことにする が発動すると共に広がった光景に、私は即座に反応できなかった。

目の前に広がる大量の緑と、そこかしこに散らばる赤やら白やらピンクやら紫やら 色の洪水といっても過言ではないそれはどこからどう見ても。

「花………？」

それ以外の何物でもなかった。

さっきまでは踝ほどまでしかなかった雑草その他は膝辺りにまで伸びて、そこかしこで影も形も見当たらなかった花が咲いている。ぽつぽつ立ってた木にも青々とした葉が茂り、花だけじゃなく実までつけている始末だ。

明らかに、異常。

原因が何なのか なんて、考えるまでもなく分かる。

……やってしまった……！

植物にも『ヒール』って効くんだ？！……あれ、でも『シーフア』の記憶だところいう現象起こったことないみたいだったのに。それ以前に『ヒール』って回復魔法じゃないの！？なんで花が咲くの！？

ええと、そうだ、とりあえずこれどうにかしないと。そのままにしてたら何の怪奇現象だって感じだし。ああでも抜いたり枯らしたりするわけにもいかないよね。

おろおろとしながら解決策を模索する。しかし良い案は思いつかない。

と、そのとき。

「わーあ絶景ー」

ぱちぱちぱち、と気の抜ける拍手と共に聞こえてきた声に、ぎくりと肩を強張らせた。

声のした方を振り返れば、見知らぬ人間がこちらを見て笑みを浮かべている。

「……誰だ」

「通りすがりの謎の剣士……いやいや冗談だからそう剣呑な目エしなさんな。お綺麗な顔が台無しよ？」

「誰だ」

「うっわー丸無視かい。……あーはいはいちゃんと答えますって。オレはタキ。旅人ってか剣士？」

いつそわざとらしくくらいに軽い口調と仕草。目に鮮やかな赤い髪と、内面を窺わせない金色の瞳。均整の取れた身体つきと隙のなさ、彼が佩いている剣が飾りではないことを示している。

警戒を強めて見つめれば、「おー、怖い怖い」と肩を竦めた。絶対おちよくってるよねこの人。

もしかして魔法使つてるとこ見られた？ っていうかなんでこの人結界内にいるわけ!?

結界の要である札に目を走らせる。……異常はない。結界に揺らぎもないし、きちんとその役目を果たしているようだ。

と、いうことは。

「……無効化か」

『シーファ』の記憶によると、特定の条件を満たすことで『魔法』を無効化できる人間が稀にいるらしい。この男は恐らくそれなのだろう。

「1」名答〜。……ところで訊きたいことがあるんだけど」

こちらに向かつて歩きながら男が言う。だけど答える義理なんてないので無言を貫く。

それに気を悪くした様子もなく、男　えーと、タキさん？ ……
…もういいや、呼び捨てで。タキはさらに近づいてきたかと思うと、
唐突に手を伸ばしてきて。

「アンタさ、何隠してんの？」

『シーファ』の、さらさらとした長い銀髪を手にとって、息がかかるほどの近距離でにやりと笑う。

…まずい！

よくわからない衝動に従って、無理矢理に距離をとる。少し髪をひっぱられる形になったので痛かったけど、優先すべきはタキから離れることだったから仕方ない。

「逃げられちゃった」

残念、と笑うその目は未だに獲物を狙う獣を髭髯とさせる。気は

抜けない。

今タキに近づかれるのはまずい。何故なのか、明確にはわからないけど。ただ、頭の中で絶えず警鐘が鳴っているのだ。

そして同時に湧き上がるのは、疑問。

(何故ここに、)

『私』じゃない。『シーファ』の、記憶？

(タキに逢うのはもっと後のはずなのに)

まるで映画のコマ送りみたいに、断片的な映像が脳裏に閃く。

『シーファ』とピアとリアルード。盗賊に荒らされる村と、連れ去られる女達。リアルードに縋り付く老婆。盗賊の根城。捕まったピアと、『シーファ』に下衆な視線を向けてくる男。悔しげに齒噛みするリアルード。地面に落とされた剣と、同時に発動した魔法。怒りに瞳をぎらぎらとさせながら『シーファ』の喉元に剣を向ける盗賊の首領。皮一枚分切り裂かれて流れた赤と、吹き飛ばされた首領の姿。剣を納めながら振り向いた赤髪と金瞳の。

それは、『シーファ』にとっての、過ぎ去った『未来』。

あるはずのない、『記憶』だった。

第一次接近遭遇・2

現実のものでない映像が途切れる。それを見ていた時間は瞬きに等しいほど短かったはずなのに、とても長い時間に感じた。

視界の中でタキがこちらに再度手を伸ばしてきたのを見て、後退する。まだ視界が定まらない。夢の中にいるみたいにふわふわする。

頭の中に浮かんできた魔法陣を顕現させ、小さく呪を紡いだ。一時しのぎだけどやらないよりでした。

伸ばされた手が静電気にでも触れたかのように弾かれる。タキが楽しげに笑みを深めた。

「へえ、やるじゃんアンタ。そこまでして隠そうとすること、気になるなー」

『隠している』……そう、隠しているのだ。『シーファ』がほぼ恒久的に展開させている『魔法』 幻術によって隠されているのは、エルフの特徴。尖った耳を見られれば即座に人外であることがばれるから、『シーファ』はそれを隠した。

幻術は一度でも破られれば、同じものは効かなくなるらしい。今ここでタキに幻術を無効化されると、確実にエルフだとばれる。

『今ここで』ばれるのはまずい、と『記憶』が告げる。

なんなんだろうこれは。『シーファ』は思っていた以上に面倒くさい……じゃなかった、複雑な身の上だったらしい。

とにかく一旦タキから逃げればいいんだろうか。とはいえこの状況で何をどうすれば逃れられるんだろう。流石に人間に向かって強力な魔法を使うのは嫌なんだけど。そもそもタキは魔法無効化できるようだし。

これぞ袋小路？ 八方塞？ どうすればいいんだろう本当に。とりあえず結果を解除しよう。ここはいわば隔絶空間になってるから、そのままだと他の人の介入も期待できないし。

札に向かって物質を消滅させる魔法を放つ。作成者「シーファ（私）の意思の元で放たれた攻撃だから、何の抵抗もなく届いた。ぱつと塵一つ残さず札が消え去る。

……この魔法、生物に向かって使えるとしたらものすごい凶悪だよね……。『記憶』からすると使えないこともないっぽいのが怖い。『シーファ』、使ったことあるのか……。

札が消滅すると同時に結界が解け、音が戻ってくる。鳥のさえずりとか人のざわめきとかそういうの。宿の食堂からだろう、食べ物の匂いも漂ってきて、そういうはお腹すいてるなーと思った。

いや、それどころじゃないんだけどね？

結界がなくなったことにも頓着せず、タキは底の見えない笑顔でこっちを窺っているし。ちょっとでも隙を見せたら襲い掛かれそ

うだ。鷹とか豹とかそんな感じで。

方や笑顔、方や無表情で睨みあう。体感的には三十分位経った気がしたけど、せいぜい一分か二分くらいだろう。……精神力のポイント（ゲームのHPみたいなもの）とかあったらガリガリ削れてるよ絶対。

どうにもこうにも仕様がない膠着状態を打破したのは、意外な人物の登場だった。

「……っシーファ！」

声と共に唐突に白銀が閃いて、タキが後方に飛び退った。急いで駆けつけたんだろう、少し乱れた金髪。『シーファ』を庇うように立ったその手には抜き身の剣が握られている。

「リアルード……？」

なんで……

「ナイトのご登場、ってか？」

ふざけた調子でタキが言うと、リアルードの纏う空気が鋭さを増した。……ていうかこれは明らかに殺気放ってるよね！？ なんで

!?

まあ傍から見て『シーファ』とタキが仲良しこよしに見えなかったのは確かだろうけど、殺気まで放つことはないよね？ 牽制なら最初の一閃で充分だったはずだし。

そんなにタキが危険そうに見えたのかな……警戒はしてたものの生命の危機は全然感じなかったんだけど。

だって。

「リアルード、剣をしまえ」

どうしてだ、と言いたげな瞳をリアルードが向けてくる。それでもタキに対して警戒を怠らないのはすごいなあ。意外とリアルードって戦い慣れしてる？

「殺気を向けるような相手じゃない」

言うてから、なんかこれじゃタキが雑魚だつて言ってるようにも聞こえるよね、と気付いたけど、幸いにもタキもリアルードもちゃんと私の言いたいことを汲み取ってくれたみたいで、怪訝そうな表情になった。

さて、どう説明すべきか。

『シーファ』の記憶から分かったのは、タキは後々仲間になる人材だったことだ。

二人に本気で戦われるのは困る。人間関係に響くかもだし。

何故なのかはまだ分からないが、『シーファ』はこの『旅』を一度どころか何度も繰り返し返しているらしい。『ループ』してるのだと言ってもいい。

だからこの『旅』の最中に起こることの『記憶』がある。だけど『私』が『シーファ』の身体に入ったことで本来の『シーファ』がしない行動をしてしまったために、『シーファ』の予期しない出来事　今ここでタキに出会うこと　が起こってしまった。

どこまで『シーファ』が辿るはずだった（あるいは辿った）道筋を外れていいのかわからないので、洗いざらい喋ってしまうわけにもいかない。というかそんなことしたらただの頭のおかしい人だ。

とりあえずうやむやにしちゃえばいいか。

「どう見えたのかは知らないが、彼は私に危害を加えようとしたわけじゃない。触れられそうになったのに、私が過剰反応してしまっただけだ」

一応、事実だ。実際タキは私を傷つける意思はなかったはずだし。

「じゃあどうして結界なんて張ってたんだ」

「少し一人で考えたいことがあって、」

「だったら別に部屋の中でも良かったんじゃないのか」

「外の空気を吸いたい気分だったんだ」

なんか糾弾されてるような気がするんですが。雰囲気怖いよレアルード。

「なんで俺が戻るまで待たなかった？ この男がそうじゃないとしても、他の誰かに襲われる可能性だってあっただろう。お前は体調を崩していたんだし」

「だから出るのは宿の敷地内だけに留めていたんだ。……そういえばレアルード、ピアは」

レアルードと一緒に行動しているはずのピアの姿が見えないと思って問いかければ、レアルードは「そんなことはどうでもいい」と言い放った。

え、ちょ、それはないだろうレアルード。ピアは弓術が使えるとはいっても女の子なわけで。そしてこの町は比較的治安が良い方だとはいえ、素行の悪い人々もいるわけで。というか曲がりなりにもパーティメンバーに対して『そんなこと』って……！

「いや、どうでも良くはないだろう。ピアはどこにいるんだ。宿の中か？」

それなら安心なんだけど、と希望的観測をもって訊いたのに、リアルードは表情すら変えずに「さあ」と言った。

「お前が魔法を使ったのを感じ取ってすぐここに向かったから……最後にいたのは雑貨屋だと思うが」

曖昧な言い方だ。きつと、殆どピアに意識を向けてなかったに違いない。……あんまりそう思いたくないけど、もしかしたら『シーファ』のことを心配していたからかもしれない。

多分、結界を解いたことで『魔法』の残滓を感じ取ったんだろう。リアルードは人の心の機微には鈍そうだけど、戦いに関することには鋭そうだ。

っていうか鈍いにも程があると思うんだ、リアルード。絶対ピアはリアルードと二人きりで喜んでただろうに。空気読もうよ。

「もしもし、お二人さん？」

不意にかかった声に、はっとする。ちょっと存在忘れかけてた。

「何だ。用がないのなら去れ。用があっても去れ」

先に言葉を返したのはリアルードだった。っていうか、あの、も

のすごい敵意を感じるんですが。用があっても去れってそんな。

「うわ、警戒心バリバリだなアンタ。……なあ、アンタ達旅人だろ？ 話し聞いている限り三人組の」

「……………」

レアルードは無言だ。さっさと消えろと言わんばかりの雰囲気だ。でもタキは全く気にする様子もなく言葉を続ける。

「一人は女だろ。で、その美人さんは魔法使い。アンタは剣士だな？」

にっこり、というようにやにやと笑うタキ。一体何が言いたいんだろうか。

「オレは一応剣士なんだけど、オレを仲間に加える気、ない？」

交渉 説得

タキの提案を聞いた瞬間に踵を返して宿に戻ろうとしたリアルドを何とか説得して、話し合いの場を設けた、のはいいんだけど…。

宿の一階のレストラン　　というか軽食屋と言っか、とりあえずアットホームな感じの食事処の片隅。周囲からは食事時の楽しげなざわめきが聞こえてきているけど、私達のいるテーブルには残念ながら和やかさはかけらも存在しない。

正面にはにににこ、というよりにやにやと笑うタキ。隣にはむっつりと押し黙って不機嫌さを隠そうともしないリアルド。

ぶっっちゃけ超空気悪い……！

いやまあ、初対面の様子からしてこうなることはわかってたんだけど。

そこをどうにかして話す空気を持って行かないやいけなだけで、とりあえずリアルドにそれを求めるのはなかなか無理難題そうなのがする。もう諦めちゃっていいかな。

「　タキ、だったか」

「うん？」

タキに話しかけた途端、横から視線が突き刺さる。痛い痛いそんな非難を込めた目で見ないで下さいリアルード。

なんでここまで敵対心(？)芽生えちゃったのかな。幾ら第一印象悪かったからってここまであからさまにはならないと思うんだけど。

そもそもリアルード、『シーファ』の記憶からすると好悪を率直に表に出すタイプじゃなかったっぽい、というか好悪自体そんなに強く抱かないタイプだったっぽいのに……。

それはともかく、さくさく話を進めることにする。できればタキの唐突発言の真意を探りたいところだけど、どうかなー。タキ、真意とか隠すの上手そう。っていうか『シーファ』の記憶からして間違いなく上手いし。何気に腹芸担当だったっぽい『記憶』が……。

「仲間に入れる気はないか、と先程言っていたが、何故いきなりそんなことを？」

切り出し方を考えるのも面倒になって、ストレートに尋ねてみる。タキはちよつと目を見開いて、それから楽しげに笑みを深めた。

「そりゃ、なんか面白そうだったから」

「……それだけか」

……うん、『記憶』にある通りのレアルードの動機そのままだ。
言われる場所が変わっただけで、何にも変わってない。

「ああ」

何か思いついたみたいに金色の瞳が煌めく。……あ、デジャヴ。

「アンタに興味湧いたから、つてのもあるぜ？」

みしべきばきつ、と不穏な音が隣からした。そつと視線を向けると、木製のテーブルがひび割れて一部粉碎された上陥没していた。ちよつと、レアルードが手を置いていた辺りだ。……素手で粉碎圧縮つて、恐つ……！

視線を上げてレアルードの様子を窺えば、背筋が凍りそうな迫力のある無表情でタキを睨んでいた。なんかいろいろ臨界点突破したらしい。宥められる気が万が一にもしないんだけどどうしよう。

ひとまずタキの発言を放置するわけにもいかないなので、言葉を返しておく。

つて言つても、『シーファ』の『記憶』通りに返すしかないんだ
けど。

「……そうか」

リアクション薄いなあ、って自分で思わないでもないけど仕方ない。

実はこのやり取り、そのまま『シーファ』の『記憶』にあるんだよねえ。つまりこれは『シーファ』が繰り返した『旅』における不可避イベントなわけで。多分よっぽどアレな返答をしない限りはタキは仲間になるのが確定している、と言ってもいいわけで。場所と状況が変わったからって、道筋が大きく変わるようなことはないだろう、多分。

……まあ、ここまでタキとレアルードの間の雰囲気が悪化したことは『シーファ』の記憶にもなかったけど。多少の警戒とか不審はあれど、今みたいにはば敵認定とかはさすがに。

どうしてこうなっちゃったかな……、いやわかってる。『私』がイレギュラーな動きしたからだよね。だから多少の苦労とか精神的ストレスは甘んじて受けるべきですよー……。

「レアルード」

呼びかけると、纏っていた底冷えるような空気を霧散させたレアルードが、なんか犬が高速で尻尾振ってる幻覚が見える勢いでこっちを見た。

……『シーファ』、一体どういう風にレアルードに接してたんだろう。なんか刷り込みとかそれ系のレベルで懐かれてない？

「彼の申し出だが、私個人としては受けた方が後々のためになると思う。彼は当人の申告通り剣士のようだし、珍しい『魔法の無効化』の能力も持っているようだ。それに、今のままだと戦闘時のバラン

スが悪いのは以前にも言っただろう。一時的にでも前衛が増えることは、これからのことを考えても良い方向に働くはずだ」

長々と（『シーファ』には）言い連ねたけど、これもまた『記憶』にある『シーファ』の言葉だ。ほぼ初対面で仲間に入れないかって聞いてくるのがタキの常だったので、毎回『シーファ』はこんなふうにはリアルードに提言していた。

……でもやっぱり、今回はリアルードの反応が悪い。いつもの『シーファ』の記憶における やりとりだと、この辺でタキのパーティ加入が決定するんだけど。

どことなく不満そうに唇を引き結ぶリアルードに、今度は『私』の意見を付け加えて言ってみる。

「リアルード。君の強さは知っているが、だからと言って、前衛の負担が君一人に集中する状態は良くない。彼は物言いこそ真剣味に欠けるし、軽薄そうな印象も拭えないが」

「ちよい待て美人さん、それは酷えだろ」

「自分の言動を顧みてからそういう台詞は口に出した方がいいと思うが」

「……容赦ねえな」

茶々を入れてきたタキは、別に気を悪くしたとかではないらしい。浮かべた苦笑は表面だけのことらしく、成り行きを興味津々で見守っているのがありありと分かる。

放っておいても全然大丈夫そうなので、再びレアルードに向き直る。

「彼の剣士としての腕は、私よりも君の方がよく分かるはずだ。ならば、彼が加わることの有益性も分かると思う。何も、君だけでは不安というわけではない。ただ、この旅に更なる安全を求めるならば、彼の申し出は願ってもいないものだというだけだ。それに」

言おうか言うまいかちよつと悩む。だけど、『私』だけじゃなく『シーファ』も思ってたことだったので、言ってしまうことにした。

「出来るだけ、皆が怪我をする可能性を減らしたい。君が傷つくのは、あまり見たいものじゃない」

言った瞬間、レアルードはきよとんとした。美形は多少の間抜け面すらカバーするのか、と感心してるうちに、みるみる赤くなっていく。……なんで？

前衛故にやたらめったら怪我をするレアルード（『旅』が進むごとに怪我の程度もレベルアップしていくんだよね、『記憶』によると。本当見たくない。いろんな意味で）だからこそその台詞だったんだけど……。

反応に納得いかないけど、何やら意見を受け入れてもらえそうな雰囲気なので、畳み掛ける。

「無理には言わないが、彼　　タキを仲間に加えてみないか」

説得にはまず視線を合わせないと、と思ってじっと見てたのに、レアルードは何だか慌てたみたいに視線を逸らした。

そのまま微妙な沈黙が続くこと、数十秒の後。

「……………。……………。シーフアが、そう言うなら」

頬を赤くして相変わらず視線を逸らしつつ、渋々って感じの態度を崩さずに言ったレアルードに、「どこのツンデレですかあなた」と思ったのは致し方ないことだと思う。うん。

……………あと正直言つて、わりとガタイの良い西洋風美形の赤面顔つて、色々微妙です。

合流

なんとか話纏まってよかったなあ、でもなんか忘れてるような、とか思ってた、ら。

「やっと見つけたっ」

ちょっと非難がましい響きを含みながらも可愛さが溢れるような声と、視界を過ぎったふわふわとした栗色の髪。

私を押しのける勢いでレアルードに抱きついた……飛びついた？彼女を見て、忘れてた何かを思い出した。っていうかタキが仲間に入れないかとか言い出す前はそれについて話してたんだっ。

そっだよレアルードがピアを放置してこっちに来てたんだ……！

「レアルード、いつの間にかいなくなっちゃってるんだもん。びっくりして探し回っちゃった」

ピアは座る私とレアルードの間に割り込むような形になってるの
で表情は見えないけど、どういふ顔してるのか想像できる声音と台詞だ。

とりあえず危ない目とかには遭わなかったみたいで良かった。私
のせいで（って言うてもいいよねこの場合。不本意だけど）そんな

ことになったらものすごく寝覚めが悪いし。

明らかにピアはリアルードしか見ていない、つまり二人の世界作ってるも同然なので、ひとまずそっちは意識から切り離す。デバガメの趣味はない。

正面のタキに視線を向ければ、何故か探るような目でじっと見られてた。凝視。穴が開くレベルで。

……あああそうだったそもそもタキって『シーファ』が隠してることを暴きたがってたんだっけ？！

多分これからはさっきみたいに実力行使に出ることはないと思うし、リアルードを防波堤代わりにすればどうにかこうにかそれなりに誤魔化せるらしいっていうのは『シーファ』の記憶からも分かるんだけど。

でもそうしちゃうと、現段階でもよろしくないピアとの関係が更にこじれそうだなあ……これまでの『シーファ』はその辺どうやって回避してたんだろう。なんかピア関連ってあんまり思い出せないんだよね。謎。

存在を忘れかけてた飲み物（なんか果実っぽい味）を飲みつつタキの視線を受け止める。

こう見るとタキって微妙に浮いた色彩してるなー。いやこの『世界』はそれはもう色とりどり、色彩豊かすぎるくらい髪の色も目の色もカラフルな人がたくさんいるみたいんだけど。ピンクとか緑とか、地毛とは思えない。少なくとも『私』の居た世界で自然に出ないような色の人が。

「ただどその中でも、赤髪に金瞳っていうのは珍しいらしくて、『シーフア』の記憶の中でもその組み合わせの人はタキしかない。……なんか理由があった気がするんだけど、何だったかな。」

そんなことを考えていたからだろうか。

傍から見たら見つめ合ってるみたいになつてたことに気付いたのは、タキとレアルードが顔を合わせてからの短い時間でお馴染みになった、不満を訴えるような自己主張の激しい視線を受けてからだった。

……この世界の人って目が口以上に物を言いすぎだと思えます。

「……レアルード、話は終わったのか？」

無視する意味も理由もないので、こっちから声をかけてみる。レアルードは頷いた。

その横からこれまた強烈な視線を向けてくるピアは見なかったことにしておく。……たかだか一言口にしただけなのに理不尽だ。

意識して聞いてなかったからどういふ会話が為されたのかは分からないけど、まあいいか。多分私には関係ない……よね？

「それならば、一度部屋に」

言いかけて、そういえば、と気付く。我関せずな感じで頬杖をついてこっちを見ていたタキを振り返った。

「君を仲間に加えるということはひとまず決定したことになるが、聞きたいことが幾つかある。今はどこの宿に？」

「身上調査かなんか？ 別にいいけど。宿はとってない。飯食いにここ来たところでアンタ見つけたから」

「そうか。私達はここに部屋をとっているから、話はそちらでするとしよう。それでいいだろうか」

「オレは別に構わないぜ？ この町で宿とるならここにしようと思っただけだ」

「……ん？ 今の言い方だと、積極的に宿とるつもりはなかったみたいだけど、タキにとってこの町って長居するつもりなかった場所なのかな。」

「そういえば『シーファ』の記憶だとタキって盗賊の根城に先に着いてたみたいだし、それっぽい。」

「では、部屋に行くでしょう。……これからについても少し話したいが、先に彼と話すことになる。リアルードとピアはもう少しこちらに居ても構わないが」

リアルードはタキのことあんまり好きじゃないみたいだし、ピアにとっては見知らぬ人レベルだろうから（そういえばリアルード一応その辺話してくれたのかな。仲間云々のときにピアが驚いた顔はしてなかったから大丈夫だろうけど）、気を遣ったつもりの言葉だ

っただけだ。

「いや、俺も戻る」

予想外に強い口調で言われて、びっくりした。

……いや別に、そんなじーっと見てこなくても反対するつもりも却下するつもりもないんですが。あとピアが明らかに不満そうな顔してるけどいいのかリアルード。

「私に否やはないが　ピアはいいのか」

「ピア？」

……なんでそんな如何にも予想外のこと言われましたみたいな顔してるのかなリアルード。もうちよつと空気読んで！

あからさまにむくれているピアを振り仰いだリアルードは、首を傾げて言った。

「買い物に行きたいんだっいたら行ってくればいいだろう」

ええええ！？　そこでどうしてそんな台詞が出て来ちゃうの？　ピアの態度のどこをどう読んだらそうなるの！？　っていうか1人で行かせる気満々だよこの人！

「……1人で買い物に行ってもつまらないでしょ」

わあすごい、位置的に見下ろす形になるのに上目使い（雰囲氣的に）とかピア、テクニシャンだ。だけど相手がリアルードじゃねえ……。

「……？j」

怪訝そつに首を捻るリアルード。通じてない、通じてないよ色々……！

なんかもう鈍いとかそういうレベルなのこれ、なリアルードに頭痛がしてきたので、放置して先に部屋に戻ることにする。良心的な何かが無駄にいたけど気にしない。だって付き合ってもらえないってこんなもの。

まあ意思疎通頑張ってください。それなりに近い部屋から応援してます。多分。

リアルードとピアに声を掛けてから、タキと共に部屋に向かう。

……ってちょっと待ってリアルード、会話ぶち切ってついてくるのは勘弁してください。これ以上ピアとの関係悪化させたくないんで！ 後生だから止めて……！！

確認

とりあえずなんとかレアルードにピアを放置して着いてくるのを諦めさせて、今度こそタキと共に部屋へ向かう。

そういえば気分的な意味で瀕死だった+寝て起きて謎の魔法陣のおかげで回復してからすぐに外に出たせいで、どんな部屋かちゃんと把握してない。広さはそこそこあった気がするけど……。

考えつつ辿り着いた部屋に入って、タキに備え付けの椅子を勧める傍ら部屋を観察して あれ、と思う。

……気のせいだろうか、この部屋二人部屋に見える。ベッドは同じサイズのもが二つ、椅子も二つ。旅の荷は部屋の隅に置いてあるけど、そもそもピアって荷物持ってたっけ……？

二部屋とつたのか、それとも経費削減的な感じで二人部屋で三人泊まるのか。ピア女の子だし、前者？ でもレアルード、部屋に案内するときこのことしか言わなかった気が。

……考えてても仕方ないか。まずは目の前にあることを済ませよう。

「で、美人サンはオレにナニ聞こつての？」

多分デフォルトなんだろうニヤニヤ顔のタキの正面に座って、な

んか含みありそんな言い方は気にせずさっさと質問を済ませることにした。

「順番が多少前後してしまっただが　そうだな。まず、君は何を目的に旅を？」

「別に何も。あえて言うなら腕試しか？」

「では、私達の目的地がどこであれ、目的が何であれ、ある程度は付き合ってもらえるということか」

「まあ、気が向く限りはな。アンタ達色々面白そーだし」

……うーん、『記憶』から予想してたけど、とっても自由人な返答だ。

飽きたらポイントとされそうな気がものすごくする。まあそれがタキなんだと『記憶』が告げてるけど。

だってタキが旅の終わりまで一緒に居たことって三回に一回くらいだよ。半分行かないうちにオサラバとかざらだったよ。ホント自由だな！

「君の都合が許す限りで構わない。最低でも大きな町に着くまでは道行きを共にしてくれればとは思うが」

せめてレアルード達が連携とかその辺をある程度こなせるようになるまでは離脱して欲しくないなあ、と思ってる言葉だったんだけ

ど。

タキはそれを聞いて　　すっごく意地悪そうな笑みを浮かべた。

「確約はできねえな。　　あなたが見返りくれるってんなら話は別
だけど？」

「見返り、とは？」

「あなたの『隠し事』の内容　　とか」

「何の事だか」

予想内の要求に、しらを切る。『シーファ』は顔に表情が出にく
い（っていうかデフォルトが無表情）タイプでよかった。何言っ
てもやってもフラットで真意が読めない感じだし。そこは中身が『私
でも変わらないはず。』

「まあ、んな簡単に教えてもらえるとは思ってないけどな。　　そ
れに、」

意味ありげに言葉を切ったタキは、獲物を狙う捕食者の目で、
射抜く。
私^{シーファ}

「　　自分の手で暴く方が、楽しみがあるってもんだよね？」

……うわあ歪んでる。いや歪んではないか。ある意味自分の欲求に素直なだけで。

とりあえずサドっ気溢れる（こういうのサドでいいのかな）発言はスルーして、本題に戻る。

『シーファ』、スルースキル高かったみたいだけど、天然なのか何かで鍛えられたのか。なんか達観と言うか浮世離れしてると思うか、そんな性格だったみたいだし、どっちもってところなのかな。

「先程君は剣士だと自称していたが」

「それが？」

「本当にそれだけか？」

「そりゃどついう意味だ？ 嘘を言ったつもりはないぜ？」

うん、私だつて嘘だと思ったわけじゃない。『シーファ』の記憶を見る限り、確かにタキは剣士だ。『ただの』剣士じゃないだけで。

「全ての手札を明かせとは言わない。それはこちらが手の内を晒していない以上、理不尽な要求にしかないからだ。だが、ある程度はこちらを信用してもらわなければ、道中に支障が出ることもある」

「随分、明け透けに言うな？」

「それが私の誠意だ」

暗に「隠し事ありますよ」って言ったも同然だけど、まあこれくらいは仕方ない。『シーファ』も似たような問答（？）してたし。何かを見極めるように私の目をじっと見てたタキは、暫くして軽い溜息を吐いた。

「しゃーねえな。こつちも多少は『誠意』見せろってことか」

「強要はしない。出会ったばかりの人間に信を置けなどと無理難題を言っていることは分かっている」

タキがこつちに興味を持つてることを逆手にとって言ったわけだから、興味より面倒さが勝れば離れていくことも視野に入れているし、何より『記憶』というアドバンテージがあつての台詞なのもある。

……なんか騙してるみたいで気分悪いなあ。分かつてて言ってるっていうのが。

「……それさ、分かつててやってんのか？」

一瞬、心を読まれたのかと思った。だけど、何だかニュアンスが違う。どういう意味だろう。

「それ、とは？」

「分かんないならいい。で、さっきの続きだけど」

なんか謎を放置されたけど、どうやら話してくれるらしい。どこまでかは分からないけど。

仕方がない、といった表情で、タキは続ける。

「俺は剣士だ。それは間違いない。ちょっと変わってる自覚はあるけどな。……アンタもさっき見た『無効化』と」

言いながら、タキは腰の剣に手をやる。同時に早口で何かを呟きながら空いた左手が宙をなぞる。

「『双剣使い』っつー、そこそこ珍しい特徴持ちだ」

気付けばタキの左手には、腰に提げていた今は右手に握られている剣と色違いの剣があった。

そしてその双剣は、交差して私の首元シーファにあてられている。

いつの間に、と内心驚くものの、顔には出ない。これもしかして頸動脈に当たってる？とも思うけどやっぱり表情は変わらない。

それは『シーファ』の鉄壁ともいえる無表情があるからでもある

けど、一番の理由は。

「もうちょっと、取り乱したりするかと思ったんだけどなー」

笑いながら剣を引くタキから、殺気が感じられなかったこと、だろ。

殺気なんて『私』はわからないけど、『シーファ』の経験と記憶が状況を認識するより先に『無害』だと教えてくれた。

それでもやっぱり驚いたり怖いと思ったりはしたはずだけど（曖昧になるのは自覚する前に剣が引かれたからだろう）、そこは『シーファ』の無表情に助けられた感じだ。

「……殺気が無かったからな」

「美人サン、結構戦い慣れしてる？ アンタらどっちかっていうと初心者っぽいと思ってたんだけど」

「初心者ではあるが、経験は皆無ではないというだけだ」

これ、嘘じゃないけど嘘になるのかな？ この『シーファ』は旅に出たことも修羅場を潜り抜けたこともないけど、何度も繰り返し旅の『記憶』があるから、殺気とかに敏感なんだよね。

……うーん、微妙なライン？ ただでさえ先に得てる情報量が違うから、できるだけタキに嘘つきたくはないんだけど。難しい。

「成程……って、そついや美人サン、名前は？」

……………。あ。

「すまない。礼を欠いた。シーファ・イザンという」

「まあ良いつて。シーファ・イザン……シーファな。了解」

すっかり名乗るの忘れてた……いやあの状況で呑気に自己紹介は無理だったけど。

っていうかタキが名乗った時ピアいなかったし、改めて自己紹介してもらうべき？ とりあえずリアルードがピアに伝えてくれてるといいんだけど。

気を取り直して。

「そついえば、君は何も聞かずに仲間に入れないかと言ってきたが、一応話しておくべきだろうことがある」

「何？」

「普通、まずこれを訊くものではないかと思うが 私達の旅の目的についてだ」

言えば、タキは「ああそついや忘れてた」とか呑気に言った。いやいや、普通忘れないから。

「私達の旅の目的は、ひとつ。『魔王』を倒すことだ」

「魔王　　つてあの？」

「君が何を指して『あの』と言ったかは私には分からないが、恐らくは君が思い浮かべているもので間違いないだろう」

「そりゃまた壮大な目的だな」

壮大……言われてみれば確かに。

　　つていうか、そういえば、そもそもどうしてこのメンバーで魔王を倒しに行くことになったんだっけ？ 『シーファ』の記憶の中でこの流れが当然だったから特に疑問も持たずに一緒に旅に出ちゃったけど。

ええつと、あと少しで思い出せそうなんだけど何だったかな。

高速で『記憶』を辿る。『私』の全く関わらない、旅に出る前の『シーファ』の記憶を。

リアルードに旅に必要な荷を教える　　違う。

旅立つ仲間にピアが加わることをリアルードから聞く　　違う。

一緒に旅に出ないかとリアルードに誘われる　　違う。

人々の期待にプレッシャーを感じたリアルードを宥める　　近い。

魔王の出現、伝承、運命　　これだ。

辿り着いた記憶を更に詳しく思い出そうとしたところで 慌た
だしげな足音と、乱暴に開かれた戸の音に、回想が断ち切られた。

道筋

「リアルード　それにピアも」

戸を壊す勢いで開けたのはリアルード。遅れてその後ろにピアが現れた。

……えーと、なんで二人とも不機嫌そうなのかな？

部屋に入ってきたリアルードが無言で近付いてくる。妙な威圧感を発してるけど本当に何がどうしたの……！？

シーファ私の後ろに回って威嚇するようにタキを睨むリアルードに困惑する。あと前方から悔しげな面持ちでこっちを見てるピアにも。

一体どういいう流れでこんなことに……謎だ。

まあ何も言わないってことはそう重要なことじゃないのかもしれない。

せつかく二人も来たし、タキに確認したかったこととか言っておきたかったことはあらかた話し終わつたし、これからの話をしちゃっていいだろうか。なんかそういう雰囲気じゃないっぽいけど、かといってこのままぼけっとしてるのもアレだし。

「ちようど良かった。今、旅の目的についてタキに説明していたところだが」

言いつつ立ち上がる。他に椅子がないから全員座ることはできないし、そんな中平然と座り続けるなんて芸当もできない。だって落ち着かないし居心地悪いよ絶対。

どうぞお座りください、的な感じにレアルードの方に椅子を動かしたけど、相変わらずタキを睨んでて気づいてくれない。

どうしようか考えてたらタキも立ったので、もうそのまま話に入ることにした。

思い浮かべた魔法陣を指先で宙になぞりつつ、短い呪を口にする。そして現れるのは、この周辺の地図。通ったところ以外は簡易もいいところで、おおよその方角を見るくらいにしか役に立ちそうにない。まあRPGではわりとお馴染みな感じの代物だ。

これまたお約束的に、自動マップピングシステム搭載だったりする。つまりこれから新たに行くところは、訪れた順に詳しい地図へ更新されるらしい。

どこまでもRPG風なことになんだかちょっと微妙な気分になるけど、まあ便利は便利だ。

地図を出したことで全員の注目が集まったので、机の上に地図を広げて本題に入る。

「私達が今居る……リリスの町はここだ。そして魔王が居ると言われているのはこの辺りになる」

言いながら、ちょうどリリスの町から正反対の場所にある広大な

空白の部分を指し示す。

地図上で見るだけでうんざりするような距離と種々様々な天然の防壁は見ないことにした。まともに考えると心折れそう。

「ひとまずは、このまま次の町に行こうかと思っただが」

「あ、ちょっと待ったシーファ」

「……何か問題があったか？」

遮ったのはタキだった。地図を覗き込んだタキは、行こうとしていた町とリリスの町のちょうど中間くらいの地点を指先でトントンと叩く。

「この辺にひとつ村があるらしいんだよ。俺、そこに届け物する依頼受けててさ。直接向かうよりちよつと遠回りになるけど、寄ってもらえるか？ 品渡すだけの仕事だから時間はとらないし」

そのタキの言葉にまたレアルードの機嫌が微妙に降下した気配がしたけど、それよりも問題は。

「やっぱり変わらないのか……」

「ん？ なんか言ったか？」

「……いや。大きく道から逸れているわけではないんだな？」

「ああ、そのはずだけど。ただ、あえて立ち寄るには離れてるし、商売とかするにも村の規模が小さいから、あんまり行商人とかが寄りつかないんだと。だからわざわざ依頼がきたってわけ」

この辺りでは、届け物といえば信頼のおける行商人……商隊などに頼むのが主流だ。その巡行ルートにかからない場所となると、届ける手段が限られてしまう。

だからこそ、タキのような流れの剣士に依頼が来たんだろううけど。

「お前は『証』持ちの旅人なのか」

少し驚いたようなリアルードの言葉に、ハツとした。

『証』というのは、俗に『教会』と呼ばれる組織に認定を受けた者が持つ、ある種の身分と資格の証明みたいなものだ。『教会』の本義は別にあるけれど、ゲームとかでいうギルドのような役割も果たしているので、そこを通して今回のような依頼を受けたり出したりもできる。

『シーファ』にとってタキが『証』持ちなのも『教会』に繋がりがあがあるのも当然だったから全く疑問に思わず流しちゃったけど、今のつつこむなり驚くなりするところだったよ……！

何故なら『証』持ちはそれなりに希少だからだ。『教会』に依頼を出すのも依頼を受けるのも基本的には誰でも可能なんだけど、それは一定区域内　つまりひとつの『教会』支部（みたいなもの）

の管轄内で済むもののみらしい。

リリスの町にある『教会』の管轄区域はリリスの町の中だけ。つまりタキの言った村は管轄外に関わらず、タキはその依頼を受けてるってことになる。それはタキが『証』持ちだという事実を示すわけ。

見れば、レアルードもピアも少なからず驚いた顔をしていた。：
え、私？^{シーファ} もちろん相変わらずの無表情ですが。

あれだよ、『シーファ』がこれまで表情筋使わなすぎたから感情が顔に出にくいんだよ絶対。

「まあ、一応そうだけど。確かめるか？」

「……別にいい」

途端に嫌そうな顔になったレアルードに内心苦笑する。というのも、『証』は身体のどこかに刻まれるものだからだ。

パツと見てわかる場所がないなら、どこかしらを露出してもらわないとならないかもしれない。それを想像してレアルードは嫌がったんだと思うと、ちよつと笑えた。

「……話を戻すが、大して距離も変わらないだろうし、私は君の言う村に行くことに異論はない。レアルードとピアはどう思う？」

「シーファがいいなら、俺は構わない」

「……レアルードがいいならいいけど」

なんか似たような返答をした二人（とはいえある意味全然違うことを言ってるわけだけど）に微妙な気持ちになりつつ、「……だ、そうだ」とタキに向き直れば、にっこりと 胡散臭いくらいの満面の笑みでお礼を言われた。

……裏しか感じられないっていうのもある意味すごいよ、タキ。そしてレアルード、一応今のはみんなにお礼言っただけなんだから、ブリザード発生させるの止めてください。

未だ広げたままの地図に目を落とす。タキが示した村がある辺りを指でなぞって、気付かれないように溜息を吐いた。

さつきここから次の町にそのまま向かうことを提案したのは、『魔王』が居るといふ場所に向かうのに効率的だからだけじゃなく、確かめたいことがあったからだった。

何度も『シーファ』が繰り返した旅の中、絶対に辿る道筋がある。その一つが、リリスの町から次の町の間にある、小さな村 盗賊に荒らされる村、だった。

そこで出会うはずのタキとリリスの町で出会ったから、もしかしたら、と思ったけれど、結局はその村に立ち寄ることになってしまった。

変わらない。変えられない。それが『運命』だともいうように。

だとしたら　その『運命』は、誰が決めたものだっていうんだろ。

……その答えを、多分『シーファ』は知っている。だけど、『私の『知識』には、ない。それはきっと、『シーファ』が答えを隠したから。

ただ、時が来ればわかる、とだけ『知識』が告げる。

……本当、『シーファ』はなかなか面倒で厄介で複雑な身の上らしい。『運命』とかもう一般市民の手に負えないんですが。

まあ、ひとまずは『旅』を進めていくのかなさそうだよ……人間関係もちよつとアレな感じなのに大丈夫なのか不安だけど、仕方ない。

やれることをやるしかないか、と開き直って、顔を上げた。

……とりあえずは、シーファとタキの睨み合い（睨んでるのはアルードだけだけど）を止めさせるべきだよね、うん。本気で先が思いやられる……。

夢

その後のことは、まあ詳細には語らない。

軽く町を散策してちよつと買い物して食事なんかをしてから各自就寝した、とだけ。

ちなみに部屋割りは私とタキとリアルード（とつてた二人部屋に一人プラスする形で落ち着いた。追加料金は発生したけど新たに部屋を取るよりは安いらしい。まあベッドとか足りないしね）、そしてピアが一人部屋、ということになった。

元々ピアは自分で部屋をとっていたらしい。まとめてリアルードがとつちやえばよかったのに、と思っただけど、何か理由があるのかな？

リアルードとタキが同席するとどうしてもギスギスする空気は、もう仕方ないと割り切ることに決めた。どうせ『シーファ』の記憶でも、タキ参入後しばらくはぎこちない空気だったし。

それにしても、リアルードは妙に『シーファ』に過保護と言うか、意識を傾けすぎてると思うか……そんな感じなんだけど、理由がよく分からない。タキに対して隔意があるっぽいのも、多分それが関係していることじゃないのかと思うんだけど。

もしかしたらまだ思い出してない『記憶』にそのヒントがあるのかもかもしれないけど、ちよつとした知識を思い出すだけならともかく、『シーファ』の体験した出来事そのものを『思い出す』のは結構な負担になるみたいだから（一気に追体験するみたいな形になるからだと思う。タキのことを思い出した時が良い例だ）、しばらくは理由不明のままでもいいかもしれない。

……それにしても。

「この不思議空間って、何？ 夢……なの？」

真っ暗な、自分の姿も確認できないような空間で眩く。

思わず独り言を言ってしまうくらいには動揺してるんだな、と頭のどこかで冷静な自分が判断する。でもどっちかっていうとパニック気味だ。

状況とか、覚えてる限りの最後の記憶とかを考えるに夢なんだろうけど、ここまで意識が鮮明な状態の夢は多分初めてだ。明晰夢ってやつだろうか。

……って、あれ。今、言おうと思ったそのままの言葉が声になっただよね？

「気のせい？ それとも、夢だから？」

今度はあえて思ったことを口にしてみる。やっぱりそのまま言葉になった。

そんなの当たり前前のはずなんだけど、それが『当たり前』じゃないのに慣れつつあったから驚いてしまった。誰かに伝えようとしながらだと手が勝手に翻訳した文章を書くのと同じ原理なんだと思うけど、言葉を発するときには勝手に『シーファ』の口調になっていたのだ。

『シーファ』は妙にお堅い口調だけど、あの外見と声で（見た目

もさることながら、『シーファ』は声もよかつたりする（私の口調だと違和感ありまくりだから良かったのかもしれない）。

「で、結局ここがどこかはわからないわけだけど」

ぐるりと辺りを見回した……つもりだったけど、真っ暗なうえ自分の身体さえ見えないし、正直感覚もあやふやだったりする。とりあえず見回せたかどうかも不安になるくらいに何も見えない。闇なんだか何なんだかわからないものしか見えない、というか見えてるのかもわからないレベル。

っていつか今更気づいたけど、これ『私』の声だ。

『シーファ』の声じゃなくて、『私』の声。ということとは、今の私って『私』自身の姿なんだろうか。見えないけど。あ、触ればわかるかも。

そう思って、実行に移そうとしたところで。

【伝　　て　　る　　ろ　　う　　か】

途切れ途切れの音が耳に届く。同時に、虫食いのような文字が脳裏に閃いた。

錯覚かと思ったけど、もう一度聞こえた　　そして見えた文字に、そうじゃないと確信する。

【　　伝　　わ　　っ　　て　　、　　い　　る　　だ　　ろ　　う　　か】

「え、えーと……?」

錯覚じゃないのはわかってても、理解がまだ追いつかない。正直ちよつとしたホラーに近い現象だと思うし。

でも、その『声』に聞き覚えがある気がして　そして気付く。

「シーファ……?」

【ああ、そうだ。……伝わっているのなら、良かった】

どこかまだ遠い声と、掠れたような銀色の文字。今にも消えてしまいかねないような、そんな印象を受ける。

【まだ安定していないから、そう長くは会話をする事ができない。すまない】

続けて伝えられた言葉に、その印象が間違っていないかったことを知る。

シーファの言い方は、これから先安定することもある、安定すれば長く会話することができると感じる感じだったけど、何だか不安になる。本当に消えてしまうと思ったわけじゃないのに、何でなのかは自分でもわからなかった。

【恐らく君は私に聞きたいことも言いたいことも沢山あるだろうと思うが、】

【時間がない。だから、忠告を少しだけ】

申し訳なさと焦りとが滲む声に、気にしないでいいと口にすれば、ほっとしたような気配が伝わってきた。

……そういえば、この空間の中にシーファは居るんだろうか。声はどこから聞こえてるのかもよく分からないし、頭に浮かぶ文字は判断の手助けにならない。

まあ、今は特に重要じゃないから気にしなくてもいいか。

【私の辿った道筋は、あくまで目安程度に考えておいた方がいい】

【必ず辿る道筋もあれば、一度や二度しか辿らなかつた道筋もある】

【君は君の思うまま、進んで行ってほしい】

「気にしすぎるのは駄目だってこと？」

【それもまた、君の選択だ】

【全く同じ道筋を辿れたことは、私にもない】

【君が君であるという事実によって、君は私と同じ道筋を辿れないだろう】

【……ただ、危険を避ける参考にはなるはずだ】

【巻き込んだ私が言うことではないが、極力君に危険な目には遭ってほしくない】

私が『私』だから、『シーファ』と同じ道筋を辿れない。それはすぐ納得のいくことだった。タキとあの場所出会ったことだっ

て、その一環なんだろう。

……危険については、あまり考えないようにしていたことだったから、ちよつと気持ち沈む。

シーファの『記憶』では、シーファ自身が死にかけるような目に遭ったことはないみたいだったけど、私から見れば大怪我程度は普通にしていて。エルフだからなのか何なのか、尋常じゃない回復力が備わってるから大事にはならなかったみたいだけど。だからって痛みまで軽減されるわけじゃないし、私はマゾじゃないので痛かったり苦しかったりは極力お断りしたい。

【それと、魔法についてだが】

【私が『魔法』と定義づけしている程度のものならば問題はないが】

【 の枠を える な『世界 』を うの 、 だ】

本当に、唐突に。

最初に聞こえた時のように、途切れ途切れの言葉と虫食いのような文字だけを残して。

不思議な真つ暗な空間も、シーファの気配も、何もかもが消えてしまった。

「 え? 」

思わず漏れた間抜けた『声』が、『シーファ』のものになってい

るのに驚く。

さら、と視界の隅を流れたのは、見慣れてきた銀色の髪だった。

……どういうこと？ 単に、『会話』が続けられなくなっただけ？
首を傾げつつ、現状を把握する手がかりがないか周囲を見てみよ
うと顔を上げる。と。

【 は や く 】

嫌になるほど鮮明に聞こえた……見えた言葉に息を呑む。
シーファの言葉を表す文字が清廉な銀色なら、今見えた文字は淀
んだ赤色。見るだけで不吉さに総毛だつような 濁った血の色だ
った。

【 は や く こ こ ま で お い で 】

伝わってくる感情は、どこまでも愉悦に塗れていて。
まるで無邪気で残酷な子どもが、お気に入りの玩具で遊ぶのを心
待ちにするような。
そんな、声だった。

【 おいで 『 シーファ・イザン 』 】

そして、私の名前が呼ばれた瞬間、それは始まった。

頭の中を、血の色の文字が、無秩序に、ぐちゃぐちゃに、掻き回す、ように、踊って、踊り狂って、侵食して、めちゃぐちゃに、すべてを、壊して、蹂躪する、ように。

壊れる、壊れてしまう。壊されて、しまう。

わけがわからないまま、恐怖とそれを上回る何かに、叫び出しそうになったとき 必死な誰かの声が聞こえた、気がした。

そしてまた、全てが遠く消えていった。

ああ、目が覚めるんだと 助かったんだと、そう思った。

夜話

「シーファ！」

開けた視界の中、最初に認識したのは月光に煌めく金色だった。

回らない頭とやけに重い身体を意識しながらなんだろうと思って、
気遣うような碧眼と視線ががち合って気付く。

……ああ、レアルードだ。

「よかった、目が覚めたか。随分魔されてたけど　また例の夢か？」

……『例の夢』？　なんのことだろう。

疑問に思うけど『記憶』は想起されない。ただ、こういうふうに
レアルードに起こされるのが初めてではないということだけが分か
った。

身体を起こしながら考えたけど何て答えるべきか分からなくて、
曖昧に首を振る。それをどう解釈したのかは分からないけど、レア
ルードはほっと息を吐いた。

「………すまない。私のせいで起こしてしまったか」

言つと、「違う」と即答された。どこことなく必死な否定に不思議に思つけど、理由を訊くことはできなかつた。

コンコン、と小さなノックの音と共にタキが部屋に入ってきて、リアルードがベッドから離れてしまったから。

シーファ
私とリアルードを交互に見たタキは、ちょっと肩を竦めてからこつちに近付いてきた。

「目、覚めたのか。……とりあえず、ほら」

差し出されたカップを反射的に受け取る。鎮静作用のあるお茶が何かなのか、気持ちが落ち着くような香りがした。

「それでも飲んでちよつと落ち着けよ。アンタ、今にも死にそーな顔してんぜ？」

それはおおげさじゃ、と思つたけど、やけに真剣な顔でリアルードが頷いてるのが見えたからおとなしくお茶（飯）を口に運ぶ。やっぱりハーブテイみたいな味がした。

あの『夢』　　そう呼んでいいかもわからないような、禍々しい『誰か』の『声』から抜け出せたのは、多分リアルードのおかげ、なんだろう。覚める間際に聞こえた声は、リアルードのものによく似ていた。

『シーファ』のものはともかく、あの血の色の言葉の主は誰だっ

たのか 何だったのかが気にかかる。思い出すと嫌悪感なのか恐怖なのかよく分からないものがこみあげてきて、振り切るようにぎゅっと目を閉じる。血色の文字の残像が、まだ瞼の裏や頭の中に残っている気がした。

気分を変えようと、少し離れたところに移動したレアルードとタキを見れば、何やら小声で会話してるみたいだった。内緒話だろうか。

もしそうならあまり見ない方がいいのかもしれないと思って、窓の外へと視線の向きを変える。眠る前よりも中天に近付いた月が夜空を照らしていた。寝ていたのはそこまで長い時間じゃなかったみたいだけど、ぐっすり眠っているべき時間なのには変わりない。

レアルードは否定したけど、やっぱり起こしてしまったんじゃないだろうか。二人の話が終わったら、その辺りを改めて訊こうかな。

やることもないので、少しずつお茶を飲みながら『シーファ』の言ったことを反芻してみる。

最後の方は聞こえなかったけど、聞こえた分だけでも結構重要なことを言われていた気がする。

私は『シーファ』の記憶全てを見たわけじゃないし、そんなことしたらなんかヤバそうなのだけは分かるからやるつもりはないけど、ある程度は思い出したい とうか、把握したいと思ってる。シーファが言ったように、危険を避ける指標にはなるだろうし、ある程度の『道筋』は知っておいた方がいいと思うから。

タキとかレアルードに関係する出来事とかは断片的に分かるんだけど、例えば何度も戦ったはずの『魔王』についてとか、これから

先のパーティーメンバーについて（仲間になりうる人が他にもいることだけは分かっている）とか、知っておきたいのに思い出せてないことはたくさんある。

……それに。

『意図的に』思い出せないようにされている『記憶』もいくつもあるみたいだってことは、何となくだけど感覚で分かっていた。『運命』を決めた『誰か』のこのように、『シーファ』が隠した『記憶』 『知識』が。

理由があつてのことだろうっていうのは簡単に予測がつくから、またあの不思議空間で会話できたとしても、『シーファ』に直接聞くつもりはないけど。

なんてことをぼんやり考えていたら、無意識にお茶を飲み干してしまっていたらしい。傾けたカップから馴染み始めていた味が流れ込んでこなかった。

ちょっと間抜けだな、とか内心苦笑しつつ顔を上げたら、いつの間にか話が終わったらしいタキとリアルードがこちらを見ていた。どっちもどことなく気遣わしげなのが少し居心地悪い。

タキ曰くの「死にそーな顔」も大分回復したんじゃないかと思っただけど、そうでもないのかもしれない。

「話は、終わったのか」

「……あ、ああ」

「飲み終わったんなら横になれば？ どうせまだ起きる時間じゃないしな」

「いや。目が冴えてしまった。しばらくは起きている。……先程レアルードにも言ったが、私のせいで起こしてしまったのならすまない」

「^{シーファ}私の言葉を、レアルードが口を開くのより一瞬早く、タキが軽い口調と仕草で否定した。」

「いや？ 俺もレアルードも、元々起きてたからアンタが謝ることじゃねえよ」

「……起きていた？ だが、二人とも私より先に眠ったのでは」

二人が寝静まった後に私は就寝したはずだ。^{シーファ}「私」はともかく、『シーファ』の知識と経験からして気配を読み違えるはずはないのに、どういうことだろう。

その疑問には、レアルードが答えてくれた。

「……一度、お前を抜きで話したほうがいいと思って、夜中に下の食堂で会う約束をしていたんだ」

「オレとしてもずっとあんな調子でやりとりすんのはゴメンだったからな。了解したワケ。途中で血相変えて部屋に戻るからナニゴトかと思ったけど」

「それは……」

レアルードが口ごもる。ちらりと私を見て、そのまま黙ってしまった。

……なんだろう。気になる。

でも聞いてほしくなさそうなレアルードの様子に躊躇ってたら、そっぴや、とタキが声を上げた。

「汗とかかいたんだっいたら着替えといた方がいいんじゃないの？
着替えくらいあるだろ？」

「ああ、そうか。そうだった、な」

確かに少しべたべたする、気がする。とはいえ、『人間』に比べたらエルフはあんまり汗とかかかないみたいだけど。

そんな『シーファ』の身体でこれなら、人間の身体だったら汗びっしょりになってたに違いない。

だけど、せつかく気遣って(？)くれたんだし、着替えようかと立ち上がって　　くらり、と視界が傾いだ。

……あ、違う。単純に私が倒れたのか。

うまく身体に力が入らない。なのになんで完全に倒れてないんだろっ、と思っで、そこでやっと、タキに支えられてるのに気付いた。

「危ねーな。言えば着替えくらい取ってやるから、大人しく寝とけ
って」

「す、すまない」

予想外に近くにあったタキの顔に、一瞬動揺する。声が上擦りか
けたの、気付かれてないといいんだけど。

タキが私をベッドに逆戻りさせる間に、レアルードが着替えを取
ってきてくれた。……あれ、またどことなく機嫌悪そうな気がする
んですがなんで？

……あと、着替えづらいので二人ともガン見するの止めてくれま
せんか。ちよつとくらい視線逸らしてくださいお願いします。
それともこの世界って他人の着替えをガン見する文化でも……い
や、ないな。

……一応、じつと見られたの最初だけで、一部始終余すところな
く観察されることはなかったことは、双方の名誉のために付け加え
ておく。

なんか、気絶でもするんじゃないかって気になったが故のことだ
つたらしい。それにしても半端ない目力だったけどね……。

それは不可避の、（前書き）

ぬるいですが暴力描写があります。

それは不可避の、

改めて眠りについた翌朝の体調は、すごぶる快調とまではいかないものの、まあ旅に支障ないくらいには回復していた。

寄る予定の村までは一日かからないくらいの距離ということで、朝のうちにリリスの町を出るということは昨日話し合ってたんだけど、あっさり出発というわけにはいかなかった。

昨日の前半の体調不良と夜中の悪夢による不調のせいか、やたらと心配してくるリアルードを軽くあしらひ（まともに相手をするとう発を遅らせようとかい出しかねないレベルだった）、突き刺さるピアの視線を意識から除外し、「抱えて行ってやるうか？」とかふざけたことを言うタキをいなして、どうにかこうにか町を出て。

道中は特に問題なく シーファ 私にちよっかいかけてくるタキと、それに不機嫌になるリアルードと、それに輪をかけて不機嫌になるピア、という何とも言い難い構図はあったもの。順調に進んだ道程の先、辿り着いた村は。

……略奪の真っ只中にあった。

泣き叫ぶ声がする。親を呼ぶ子どもの声。恐怖と嫌悪に震える女の声。子を守るうとする親が逃げると叫ぶ。それを嘲笑するかのように響く、下卑た笑い声。

簡素な木造の家の扉が破壊されて、見るも無残に傷ついた男性がそこから転がるように出てきた。違う、投げ出された。

「……………ッ!」

息を呑んだリアルードが、今まさに連れ去られようとしている女性を助けるために駆け出す。一瞬後に別の方向へと走り出したタキが、すれ違いざまに「アンタらはここから動くなよ」と鋭く告げた。

……………何、これ。

問いにすらなっていない思考に、『シーファ』の記憶が『盗賊による略奪』だと告げる。

……………知っている。それとも、『知っていた』?

そう、深く考えていなかっただけで、『私』は知っていたはずだった。この村が盗賊に荒らされる『運命』にあることを。

『シーファ』が幾度旅を繰り返しても、それを回避することはできなかつた。旅の『はじまりの日』は決まっていて、『シーファ』はリアルードと旅に出ることしか許されてなくて、だからどうして

もこの村を救えない。

『シーファ』の記憶の中、何度も何度もこの村は蹂躪されて、荒らされて、搾取され、そしていつか再生する。生々しく、陰惨な光景を経て、『日常』を取り戻す。

そうであってくれと『シーファ』は願って、繰り返し繰り返し復興に手を貸した。気付かれないように、エゴであることを知りながら、己の持てる力を一握りだけ。それすら本当は赦されないと、身を以て思い知る。その繰り返し。

『シーファ』の苦しみを『思い出す』。まるで自分のことのように。

なのに、どろして。

『私』は、目の前の光景を、遠い映画の出来事のように思ってるんだろう。

叫び声。悲鳴。人間が、殴られる音。

昨日の『血の色の声』より、生々しく身に迫る　そして『私』

が体験したことのない、暴力で彩られた光景。

ショックを覚えて、悲鳴の一つでもあげて、逃げ出してもおかしくないこの光景を、どうしてこんなに平静に見ているんだろう。

混乱してる？ ショックを受けて動けない？ 自覚のないパニック状態？

そのどれもが違うのだと、どうしようもなく『分かって』しまう。

…シーファ。

きっと、呼びかけても届かない名前を、唇だけで呟いた。

笑い出したいような、泣きたいような 心の中がぐちゃぐちゃでどうしたいのかすらわからない。

「……これも、『出来る限りのこと』のうち、か」

『私』の世界がこと比べてあまりにも平和で、平和すぎるから。こんなふうに『私』の常識とかけ離れた光景が日常茶飯事に起こるから。

『私』の精神が壊れないように、狂わないように、『シーファ』は制限をかけたのだ。

『基準』を超えた感情が、『私』に認識されないように。

『シーファ』に悪意なんかなくて、全くの善意によるものなのは分かってる。

……だけど、この『私』の状態が。

『異常』で、『怖い』としか、思えない。

『感覚』でそうあるべきだと思う『自分』と、実際の『自分』が乖離する。

無意識に握りこんだ指先が、震えている。なのにただ荒らされる村の様子を見続ける自分がいる。

気持ち悪い。怖い。いやだ。なんで、こんな、

「 離してッ！」

唐突に近くから聞こえた怯えを含んだ声に、はっと我に返る。

いつの間に動いたのか、村の奥に近付いていたピアが、屈強な男に捕まえられていた。なんとか拘束を逃れようともがいているが、相手はびくともしない。

近くにはリアルードの姿もタキの姿もない。何人が盗賊と思われる男が倒れているところを見ると、この辺りを制圧した後奥に向かってしまったらしかった。ピアを捕らえている男は、タイミング悪くリアルード達と会わずにこちらに来たんだろう。

タキが「動くな」と言ったのは、私とピアが近接戦闘に長けていないからだけじゃなく、ちょうどこの場所が死角になるからでもあったのに。 どうしてピアはあそこにいるんだろう。

思考に沈んでピアに気を配っていなかったことを悔やみつつ、自分のとるべき行動を考える。

やみくもに出て行っても勝算はない。まったくできないわけじゃないけど、『シーファ』は接近戦に向いてない。かと言って、魔法を使うには二人の距離が近すぎる。『シーファ』の『魔法』は基本的に範囲指定だから、巻き込まないで済む保証はない。やりようによっては不可能ではないかもしれないけど、細かい指定までできるほど『私』はまだ魔法に慣れてない。

「離せて言ってるでしょ!? はなッ」

不自然に途切れた声に目を凝らすと、当身でも食らわされたのかぐったりとしたピアを、男が抱え上げるところだった。

このままだとピアもこの村の人達のように連れ去られてしまう。多少巻き込むのを覚悟で『魔法陣』を顕現させかけたところで、

「おっと、オイタはダメだぜエ、『シーファ・イザン』？」

一瞬で背後に現れた圧倒的な気配と、楽しむような声、そしてねっとりとした『闇』が視界を覆い潰すのを認識したのを最後に。

『私』の意識は、途切れた。

『ジース・アルレイド』

鏡の向こう側、『シーファ』が必死な様子で何かを言う。いつかと同じように声は全然聞こえなくて、『シーファ』はそれでも懸命に何かを伝えようとしていて、『聞こえない』ことにすぐく申し訳ない気分になる。

そつと、鏡に触れる。冷たい感触に阻まれて、向こう側に手を伸ばすことはかなわない。だけど、触れた箇所からじわりと染み出すように、『シーファ』の感情と思考の断片が伝わってきた。

何よりも強く感じとれたのは『焦り』。それから、『動揺』。どうして、という思いと、やはり、という諦念。

(勘付かれたか)

(否 まだ『気まぐれ』の範疇のはず)

(直に会いさえしなければ、気付かれることはない)

『彼』が村に現れることは今まで無かったのに、と考える一方で、あの『接触』のせいだ、と納得する 『私』じゃない、『シーファ』の思考。

『シーファ』が魔法陣を描いた。それがふわりと『私』に向かう。前のものとは違う、その魔法陣が示すのは 外敵を退けるための障壁。

それが『私』を包み込んだ瞬間、弾かれるような衝撃が『私』の意識を揺るがして　意識が、覚醒した。

「　ッてエなあ……………」

受けた痛みを表す言葉と裏腹に愉たのしげな笑みを浮かべた顔が、すぐ近くにあった。驚きに一瞬息を呑んで、慌てて現状の把握に努めようと視線を動かせば、彼が手を掛けたんだらう裕がわずかに乱れているのに気付く。

『シーファ』が何のためにあの『魔法』をかけたのか理解してそしてその危機が未だ去っていないことも同時に知った。

目を開けた私シーファに気付いているだろうに、大した反応も見せない男は、赤く爛れた　そして今まさに修復されている右手をぶらぶらとさせながら、もう一方の手を伸ばしてくる。再び展開された障壁を力技でこじ開けようとするのに、咄嗟に顕現させた魔方陣で本体ごと吹き飛ばした。

空中でぐるりと回転し、何事もなかったかのように着地した男

『ジラス・アルレイド』を、立ち上がって真正面から見据える。

褐色の肌、顔の半分以上を覆う、刺青に似た紋様。切りそろえられていないざんばらの髪が、限りなく黒に近い藍色なのだ。『知っている』。

彼もまた、『シーファ』の幾度も繰り返した旅の中で、一度ならず顔を合わせることがさだめられている人物だった。

「　何の、つもりだ」

「アレ、聞こえてなかった？ 『オイタはダメだぜ』 って言つたる？」

「しばらく会わないだろうという趣旨の言葉を聞いたのはつい先日だったと記憶しているが」

「あつはつは、そりや事情が変わつちまったから仕方ない。まア、あつちには介入する予定はなかったんだけどな。ついうっかり手エ出しちまった」

からからと笑う目前の男は、純粋な人間じゃない。もちろん『シーファ』と同じエルフであるわけもない。

『魔王の眷属』、そして ある意味では『シーファ』の昔馴染みと言える人物、だった。

「俺様悲しい中間管理職だからさア、ちよつと行つて来いって言われたら拒否権無いわけよ。魔王サマも何が気になつたんだかねエ？」

「私が知るはずがないだろう。……それより、ここから出せ」

「せつかちだねエ、『シーファ・イザン』。まアもうちよつと付き合えつて。まだ『確認』終わってないんでね」

さまざまな色をぐちゃぐちゃに混ぜ込んだ末に出来上がったような混沌の闇が広がるここは『ジラス・アルレイド』のテリトリーだ。『魔王』に近いが故に与えられた力と、ジラスが生来持っていた力が合わさって作り出された、異空間。

ぐにやり、と近くの空間が歪む。そこから溢れだすように現れた
ジアスが操る『闇』を『魔法』で打ち消そうとするも、『闇』は魔
方陣すら塗りつぶす。

ここは『ジアス・アルレイド』に有利すぎるフィールドなの
だと、『記憶』が告げる。けれどそれは現状を打破するのに何の役
にも立たない。

質量を増した『闇』が幾つもの魔方陣を呑み込んで、その触手を
私に伸ばすのを視界に収めながら、身を翻そうとして 『ジアス・
アルレイド』本人に阻まれた。

「ッ…！」

「おお痛エの。俺様の回復速度上回るたア、また随分とえげつない
『魔法』なことだ」

音を立てて爛れゆく己の手に頓着せず、私の首を鷲掴みにしたジ
アスは飄々と軽口を叩いた。触れた場所から、『シーフア』が作り
上げた『魔法』が無理やり壊される感覚がする。同時に、『シーフ
ア』の中に注ぎ込まれた『闇』が活性化して、身体の自由を奪う。
意識を失っている間に準備が為されていたことを理解して、苦々
しい気持ち湧き上がった。多分、最初の接触時 『闇』によつ
て意識を奪われた時に仕込まれていたんだろう。

「は、なせ…っ！」

「言われて離すくらいなら最初からやってねエって、なア？ 俺様だつてちよつぴり心苦しいんデスヨ？ これでもお前のこと気に入ってんだぜ、『シーファ・イザン』」

そう言いながら、『魔法』を完膚なきまでに壊していく彼の顔は愉しくて仕方がないと言わんばかりの表情だった。

『気に入っている』からこそ愉しんでいるのだと、言われずとも分かる。

『魔法』が壊される速度に反比例して、ジアスが受けるダメージは減少する。時間を巻き戻すかのように『修復』されていく掌の感触が生々しい。

それに顔をしかめる私シーファを愉しんでいる風なのがまた趣味が悪い、と思う。

……『ジアス・アルレイド』が快樂主義の嗜虐サテイスト趣味なのは『シーファ』の記憶からなんとなく分かってたけど、ここまでとは。

完全に壊された『魔法』の残滓が消え去るのを待つて、ジアスは再び私の服シーファの袷に手をかけた。

「いやア、脱がしても面白くないカラダなの知つてても、なんかイケナイコトしてる気分になるねエ。やっぱ顔は大事つてことかね？」

『シーファ』の服の構造上、あっさりと袷は解かれて。

肌蹴させられた服の隙間から褐色の指が肌に触れた。つう、と指先がなぞるのは、今は発光することもなくただ在るだけの黒色の文様。

「うーん、特に変化はナイっばいんだけどなア……」

ジアスの指が黒色の線に触れるたび、微かにそれが明滅する。

たっぷり時間をかけて文様の全体を確認したジアスに、少しの苛立ちと呆れを込めて言葉を投げた。

「……気は済んだか」

「うんにゃ？ ケド、ま、いいか。消えてないし壊れてもないなら、魔王サマ的には別に構わないだろーし」

やっと離れたジアスに嘆息する。拘束が解かれたのを感覚で感じ取って、自分できちんと服を整えた。

「そっぴゃ『リアルード』はどうよ？ 『タキ』も一緒みたいだったし。あとあの女も」

「……答えると思うのか」

「儀礼的なアレだって。んな怖い顔すんなよなア」

わざとらしく肩を竦めるのに苛立ちが募るけれど、反応を返せば相手の思うつぼだ。

それに、聞かなければならないこともある。

『ジラス・アルレイド』は紛れもなく敵側の人物だけど、『魔王』の動向を間接的に知るのに適した人物でもあるのだ。明確な『敵』として現れる場合以外の接触時には、『シーファ』は多少なりと彼と言葉を交わすようにしていた。

もちろん彼の言を完全に信用していたわけじゃなく、ある程度の指標にしていた、ってくらいのレベルだったみたいだけど。

「それで、何を言われてこんなことをしたんだ」

「なんか気になる感じがするから見て来い、的なカンジ？　こついう時下つ端は辛いねエ。その分待遇いいからいいけどさア。何が気になるんだか、と思ってたら俺様の不意打ちも思いつきり喰らうし、何？　なんかあったわけ？」

「……………」

「まア、俺様に言う義理はねエけどさ。『最初』は制限かけとくのがお前のやり方なのは知ってるけど、なアんかちよつと違う感じするんだよなア」

それは十中八九『シーファ』の中に『私』が入っているからだろうけれど、もちろんん口にはしない。

ちよつとの間首を捻っていたジラスは、「まアいいか」と割合あつさり考えるのを放棄してくれたので、内心安心する。

「んじゃ、まア、そろそろ頃合かね？」

ニヤリと笑ったジアスがパチンと指を鳴らすと、周囲の『闇』が急速に集まって小さな立方体を形作り、ジアスの目前に浮かぶ。それを手にしたジアスが小さく何かを呟けば、『闇』の消失により脆くなっていた空間は簡単に壊れていった。

「さア、『シーファ・イザン』。せっかくだ、楽しませてくれよ?。」

空間の欠片が砕けて宙に消えゆく中、囁くような愉悦の混じった声が耳を掠めて。

投げ出された先には 人質にとられたピアと、彼女を盾にする盗賊の首領、そしてそれに対峙するタキとレアルードという、見覚えがありながらも『記憶』とは決定的に違う光景が、あった。

予定調和

突然宙に現れて落ちてきた（ようにしか見えないうら）私に気付いたタキが目を丸くするのが視界の隅に見えた。でもそれに応える余裕なんてない。今まさに落下中だからとかそんな理由じゃなくて。

ジラスが私を解放したタイミングと、その場所が問題だったからだ。

もし目の前にジラスが居れば、襟を掴んでがくがく揺さぶってやりたいくらいには趣味の悪い場面選択だった。そして『シーファ』が辿った中には一度もなかった状況でもある。

空中で体勢を立て直して着地する。『シーファ』の身体能力が高くて助かった。それでも着地点のまずさはフォローできないわけだけども。

「っ、シーファ!？」

リアルードが驚愕に染まった声で私を呼ぶ。

視線を前へと向ければ、盗賊の後ろ姿、震えるピア、私を認めて動揺を表すリアルード、どう動くべきか状況を見定めようとするタキ。

……つまり私の位置は、ピアを人質にとっている盗賊の背後、なわけ。

やっと私が現れたことに気付いた盗賊が振り向こうとする。それを待たずに『魔法』を放とうとして 強烈な気持ち悪さに集中が乱れた。

「楽しませてくれよ」 そう言ったジアスの真意を知って、もし次会ったら思う存分『魔法』をぶちかまそうと心に決める。腹いせとしては可愛い部類だと思う。うん。

霧散しかけた『魔法陣』の構成を変化させて、軽い目くらましの『魔法』を発動させる。ギリギリなんとかあったけど、それが限界。意識をそっちに振り分けたせいで自分の身体を支える余力もなくなって、元々近かった地面が急速に近づく。せつかく綺麗に着地できたのに地面と仲良こよしにならないといけないとか酷いと思う。

じわり、とあの黒の文様が疼く。ジアスによる『確認』は、僅かに綻びかけていた『呪』を強化した。そこに加えて、『魔法』使用をトリガーにした仕掛けまでご丁寧^{ゴテイジン}に用意されたら、こうなるのは当然と言える。

隙をついたタキが盗賊に斬りかかって、それを辛くも逃れた盗賊から、リアルードがピアを救出する その一連の出来事は、見えずとも分かった。そして、絶対的な優位を覆された盗賊が、その原因^{シイファ}になった私に一矢報いようと殺意をみなぎらせて刃物を振りかぶるのも。

どこかで見た情景。『シーファ』が何度も繰り返したそれを、少し変えただけの、予定調和の『危険』。だけどここ（・・・）に伏兵は 乱入する『タキ』はいない。

もう一度『魔法』を発動させようと試みるも、今度は『魔法陣』が形にすらならなかった。

もちろんまだ身体は思うように動かせるようにはなっていない。

……ああ、これってもしかして『万事休す』ってやつ？

っていうか『私』が『シーファ』になってからこんなものばかりな気がする。昨日今日で問題ない状態だったのって半日にも満たないよね。

痛いのはヤだなあ、と思ったのと同時に肩口を鋭い痛みが襲った。そのタイミングの悪さになんだか笑いそうになって、結構ヤバい精神状態なんじゃ、と今更思う。でも村の情景を見た時のような乖離は感じられないから、それほどでもないのかもしれない。『私』にとつての非日常が続きすぎて、ちよつとテンションがハイになっただけで。

まずいかも、と思いつつも動けなくて地面に伏せたままでしたら、盗賊の気配が吹き飛ばされるように瞬間的に遠ざかった。次いで、刺さったままだった粗悪な剣が引き抜かれる感触。

「っ……」

「痛いよな、悪い。でもちよっと我慢してくれな、シーファ」

うつぶせた状態から、傷のない方の肩を支えに起こされる。

視界が霞む　それから、傷のせいだけじゃない、じわじわと広がる熱。『毒』だ、と『シーファ』の記憶が告げる。

……なんか、もう、踏んだり蹴ったりだ。何か憑いてるんじゃないだろうか、私。

『シーファ』の尋常じゃない回復力のせいで既に塞がりかけている傷に気付いたタキが小さく息を呑んで、それからもう一度「悪い」と呟いたかと思うと　手早く取り出した短剣で、傷の付近を浅く切り裂いた。

痛い……はずなんだけど、毒が回って来たのか（随分即効性のある毒らしい）、傷を中心に痺れたように感覚が鈍くなっている。裂かれたことは分かっても、痛みには繋がらない。

傷を露出させるように片肌を脱がされて、新たに血が滲んだ傷口にタキが口を寄せる。ぼんやり知覚したそれに反応するべきなんだろうと思うけど（色々な意味で）、どうにもこうにも身体が思い通りにならなかった。

何度か血を吸いだしては地面に吐き捨てるのを繰り返したタキは、私の傷が完全に塞がるのを見届けてから、見苦しくない程度に服を整えてくれる。甲斐甲斐しい　ってというのはちよっと違うか。

随分必死な様子だったなあ、と私の身を案じてだっただろうことを柵に上げて考える。

『シーファ』は毒に耐性があるとか無効化できるとかはないけれど、毒によつて死に至ることもない。それを『知っている』から、デフォルトの笑みも軽口もなく必死な様子で処置をするタキがなんだか不思議だった。いや、タキは『知らない』から当然なんだけど。

「ある程度は取り除けたと思うけど　気分は？」

真剣な様子で訊いてくるのにとりあえず言葉を返そうとしたら、ジアスのせいなのか毒のせいなのか、うまく口が動かなかつた。それを察したタキが、「話せないなら無理はするなって」と問いを撤回してくれる。

……タキつて何気に気遣いできる人だよな。惜しむらくは、普段はあえてその辺スルーすることが多々あるってことだけだ。

レアルードもタキくらい察しが良ければピアのこともうちょっとどうにかできるんじゃないのかな、と思っただけど、レアルードって日常生活以外はわりと鋭い方な気がする。注意力の使い方の問題なのかな？

そういえばレアルードはどこに、っていつか何してるんだろ。盗賊吹っ飛ばしたのは多分タキだから、つまりピアを助け出した後のレアルードの動向が不明だったことになる。

……あ、もしかしてピアも怪我とかしちゃったのかな。私と同じで毒くらっちゃったとか。その処置をしてるとか。うん、ありそう。

なんて納得しかけたところで、速攻それが裏切られた。

「シーファ、無事か?!」

勢い込んで視界に入ってきたレアルードの腕に、可愛らしく涙目のピアがくつついている。どう見ても怪我はなさそうだ。予想は全く当たっていなかったらしい。

……あ、いつの間にか視界回復してる。でもまだちょっとぼやけた感じ。傷（もう塞がってるけど）周辺の痺れもまだ残ってるし、動けそうもないなあ。あと返事も難しい。

「毒が少し回ってる。できる限り処置はしたから、安静にさせとくしかねえな。喋るのにもちよつと影響出てるから無理に喋らせるなよ?」

「誰が無理強いなんてするか!」

……言いたいことは分かるけどその言い回しはどうかと思うよ、レアルード。

案の定、タキがなんか微妙な顔になった。

「あー……分かってんならいい。で、そっちの嬢ちゃんは?」

「……怪我はないようだ。特に乱暴な扱いをされたわけでもない

らしいし」

淡々と答えるレアルードにちょっとびっくりする。テンションの落差激しくない……？

多少ショックは受けてるけど身体的な害はない、っていう内容のレアルードの報告(?)にどことなく不服そうなピアを観察していて、しきりにある場所をさすっていることに気付く。

……あ、盗賊に掴まれてたところ、ちょっと痣になっちゃってるんだ。

服で大部分は隠れてるけど、レアルードもタキも気付かないことはないだろうくらいには目立つ。

ってことは、レアルードはあれを『怪我』に数えなかったってことなんだろう。で、ピアはそれが不満、ってこと？

確かにあれは痛々しい。ピアは見た目かなり可愛い女の子だし、そんな子に痛々しい痣とかあると気になる。って思うのは、私が『私』だからだろうか。思い切り二人がスルーしてるってことは、この世界ではそんなふうには思わないのが普通なのかもしれない。

でも気になるものは気になるし、ついでにジアスの趣味の悪い仕掛けが無効になってるかを確認するのも兼ねて、威力の低い回復魔法を発動させてみる。

きらきらしいエフェクトと共に、ピアの肌に浮かんでいた痣がすうっと消えた。それに気づいたレアルードとタキがちょっと目を丸くしているのが見える。

……体調に変化がないところを見ると、どうやら仕掛けはなくなつたと考えてよさそうだ。そもそもジアスの能力だと、長時間私の『魔法』の発動を阻害することは難しい。今の『シーファ』だからこそ、ああいうちょっかいが可能だつたわけだし。

「ああ、そっか。魔法があつたんじゃん。シーファ、自分に回復魔法すれば毒も抜けるんじゃない？」

「いや、それは無理だ」

「へ？」

タキの言葉を否定したのは私じゃなくて、リアルードだつた。『シーファ』と付き合いの長いリアルードは、シーファの『魔法』についても多少知っているのだと『記憶』にある。まあ、そうじゃないと一緒に旅に出るなんてことにはならないよね。

「シーファは自分を対象に魔法を使えないんだ。体質だと言つていた」

「体質……？」

怪訝そうに呟いたタキが私に視線を向ける。何か言おうとしたのか口を開きかけたのが見えてふと気づいたように私に駆け寄り、跪いたリアルードの身体に阻まれて見えなくなつた。

……レアルード、あれだけがうちり腕をホールドしてた。ピアを一瞬で置き去りにしたよね……。ある意味すごい。縄抜きの才能ありそう。

「シーファ」

心底氣遣うような目に、なんだかかむず痒くなる。……まあ、『シーファ』の表情には出ないんだけど。

「いつまでもこんなところにいるても仕方ないし、回復も遅くなるだろう。休めるところに移動しよう」

今更だけど、現在地点は村に隣接した小さな山の一角にある、盗賊達の根城である洞窟だ。薄暗いし肌寒いしじめじめしてるし、長く居て気分がいい場所じゃない。

だからレアルードの提案は歓迎できるものだったわけだけど、残念ながら今の私に自力移動は難しい。まさかその事実を忘れてるなんてことはないよね、とレアルードの頭が鶏以下なんじゃないかとかっそり心配したんだけど、結果的にそれは杞憂以外の何物でもなかった。

……だからってお姫様抱っこ状態での移動は予想外でしたけどね

！　なんでそのチヨイス……！？

明らかに面白がってるタキでもあからさまに嫉妬してきてるピアでもどっちでもいいから、誰かつっこんで……！　居た堪れないしものすごく恥ずかしいよこれ。新手的拷問レベルだと思う。本気で。

過剰と必然

「そもそも、お前は自分の身を顧みなさすぎる」

「そんなことは」

「自覚がないだけだ。とにかく、しばらくは絶対安静だって言うた
だろっ」

とりつくしまのないレアルードに内心途方に暮れる。

『シーファ』の記憶にあるよりちよっとだけ作りの良い部屋とや
わらかなベッドになんだか微妙な気持ちになった。

ここはレームの町。盗賊に荒らされたあの村から見ればリ
スの町のちょうど反対側にあつて、この周辺では規模の大きい部類
に入る。そして、タキが受けた届け物の依頼を遂行した後に向か
うとしていた町だった。

今、私とレアルードシーファがいるのはそこにある宿の一室で　ぶつち
やけて言うつと、私はレアルードシーファによつてちよつとした監禁状態に置
かれていたりする。

……いや、さすがに監禁は言いすぎたかもしれない。何もこの部
屋から出してもらえないとかそういうわけじゃないし……。ただし
絶対レアルードがついてくるけど。というかまず部屋を出る段階で
レアルードにお伺いを立てないといけないけど。

なんでこんなことになったかと言えば、レアルードがなんか色々突き抜けちゃったからだ。

何がどう突き抜けたかを説明するには、まず盗賊の根城があった山から下りた後のことを話さないとならない。

身体がうまく動かせない状態の私をお姫様抱っこで運ぶという、私の精神にクリティカルヒット（もちろん悪い意味で）な行動をとったレアルードは、人ひとり抱えているとは思えない速度（でも絶妙に私に負担を掛けないようにしていた）で山を下りた。

明らかに他二人置き去りにする気満々だった。純粹な前衛向きの人間が本気出すところなるのか、と半ば現実放棄しつつ思ったのは記憶に新しい。

曲がりなりにも仲間である人間を事実上置き去りにしながら村に着いたレアルードは、あれよあれよという間に私を一旦村の人に預ける話をまとめ、入れ違いに村に戻ったタキに私の監視（「絶対目を離すなよ」とか言ってたからアレは監視って言っていていいと思う）を頼むと、ものすごい速度で 本当に人間なのか疑わしくなるレベルだった どこかへ走り去った。

そして何をどうやったのか、戻ってきたレアルードは、そこそこ謎えの良い馬車（とその持ち主）を伴っていた。ヒッチハイク的なことをやったのかと思っただけ、持ち主との会話を聞く限りなんかちょっと違うっぽかった。持ち主っていいところのお坊ちゃん風だったんだけど、何て言うか……憧れとか尊敬とか「一生ついていきます兄貴！」的な崇拜とかそんな感じのキラキラした何かが出てた。一体何が……？

結局詳細は不明なまま、馬車に乗せられ（全員は入らなかったからタキが御者台に座ってた。ついでに御者の仕事までしてた。いや御者の人は居ただけだ、ちよつと運転が荒い感じだったから正直助かった）、眠ったんだか気絶したんだか自分でも定かじやない意識の消失から現実に戻れば、今現在居る宿の一室だったわけで。

ちなみに後から判明したんだけど、私、^{シィッ}丸一日目を覚まさなかつたらしい。夢も何も見なかったから全然そんな感じしなかつたんだけど、やっぱり色々身体に負担がかかってたりしたのかもしれない。

だからまあ、レアルードのちよつと過剰じゃない？って感じの心配っぶりも仕方ないかな、と最初は思ってた。……最初は。

けど、いくらなんでも三日（実質四日）もこの状態なのはどうかと思うんだ……！

絶えず見張られているような生活に嫌気がさして、レアルードにそれとなく旅を再開していいんじゃないか的なことを言ってみた結果が冒頭のやりとりなわけで。

丸一日寝てる間に身体は完全回復してたし、正直ずっとベッドで寝てるのは気が滅入る。

もう大丈夫だから、と何度言ってもレアルードは信じてくれない。確かに体調悪いコンボが続いた拳句に行方不明（飯）になって、なんかよく分からないけど戻ってきたと思ったら刺されて毒まで受けちゃうとか、色々アレな感じだったけど。でも毒は即効性だった代わりに持続性はあんまりなかったし、後遺症みたいなものないみた

いだし、絶対安静っていうほどじゃないと思うんだけどな。

全く外に出してもらえないわけじゃなくても、絶えず見張られる
レアルードにそういうつもりがあるかどうかはともかく、私
はそう感じる　のは精神的に辛い。……あれ、なんかデジャヴ？

「レアルード。本当にもう体調は悪くないんだ。心配してくれるの
は有難いが、これでは身体も鈍ってしまう」

「　　そう言うから予定通りに向かった村で、あんなことにならな
かったなら信じた」

……それを言われると弱い。い、いやけどここで引き下がった
らまた同じ問答の繰り返しになるし！

「あれは、少し悪いことが重なっただけで　　…もう、あんな失態
は犯さない」

あそこで『ジラス・アルレイド』がちよっかいをかけてこなければ、
流石にあんなことにはならなかった。そもそも『シーファ』は
実力的にはかなり高いものを持つてる。盗賊に後れを取ること本
来はなかったはずだった。ましてや、丸一日寝込むなんてことも。

『私』が『シーファ』であること、それから『ジラス・アルレイ
ド』の介入によって、その『ありえない』ことは起こってしまった

わけだけど。

あの『毒』もまた、『ジラス・アルレイド』が手を加えたもの。本来ならば少し身体が痺れる程度のもだったのを、毒素を強めてより強力に『作り変えて』いたのだ。

道理で『シーファ』の記憶にあるより効きがいいと思った。……
本当、悪趣味にもほどがある。

「ッ、失態とか、そういう話じゃない！」

たまりかねたように鋭く言ったレアルードにちよつと驚く。でも、ここ数日でレアルードのそんな変化も慣れてしまっていた。

……ああ、また言葉の選択間違っちゃったか……。

「すまない、心配してくれているのは分かっている。怒らせたいわけじゃない。ただ、私は」

続けようとした言葉は、強めのノックの音にかき消された。

どことなく張り詰めた部屋の空気にも頓着せずに軽やかな足取りで入ってきたのはタキだった。その手には胃に優しくそんな食事の並んだトレイがある。

「食事のお時間ですよーっと。レアルードのは下に用意してあるか

ら行って来い。シーファは俺が見とくから、な？」

「……………。…………分かった」

少しの間を空けて、それでも頷いたレアルードが階下の食堂へと向かう足音を聞きながら、ちよつとだけ溜息を吐く。

耳聴くそれを聞きつけたらしいタキが、面白がってるんだか苦笑してるんだか微妙な声音で「お疲れさん」と言つて、ベッド脇のテーブルに食事を並べてくれる。

「まーた頭に血イ上つてたみたいだな、レアルードは」

「…………私が言葉の選択を間違つたんだ。今日も怒らせてしまった」

「^{レアルード}本人もなー…………一応自覚はあるみたいだぜ？ 自分の精神状態のマズさ。ただ、アンタの前になるとなけなしの冷静さが吹っ飛ぶだけ」

「…………どうすれば、もう大丈夫なのだと分かつてもらえるだろうか」

言葉を尽くすだけ尽くしたし、外見的にはもう健康そのもののはずだし、打てる手が思いつかない。

思わず問いかけるような呟きを漏らしてしまった私に、^{シーファ}タキはあつげらかんと言つ。

「とりあえずは、レアルードが納得いくまで休んどくしかないんじ

やね？ ……ま、アレ以上に不安定にしたいなら無理に動くのは止めないけどな」

「……やはり、そうか……」

「四六時中見張られてんのはキツイだろうから、その辺はどうにかしてやるよ。レア^{アイツ}ルドの精神安定のためにアンタが参ったらどうしようもねえし」

それは切実をお願いしたい。一も二もなく「頼む」と応えた私に、^{シーファ}タキは軽く笑った。

それにしても……これも一種の自業自得なんだろうか。

まさかここまでレアルドがシーファに精神的に依存してるとは思わなかった。多分、「シーファ」も思ってたなかっただろう。

レアルドが『魔王』を倒しに旅に出るのが運命なら、シーファがそれを導いていくのは宿命だ。表だつては無理でも、それとなく彼が『魔王』の元に辿り着けるだけの力を手に入れられるように誘導していく。

それが『シーファ』 　ただ一人のエルフの末裔に課せられた、役目だった。

『魔王』を倒すためだけに『世界』に幾つもの仕掛けを施し、いつかの未来の『勇者』を定め、そうして最後に『シーファ』だけを残して絶えたエルフという種。

その集大成こそが『シーファ』で、唯一であるが故に、どこにも、誰にも続かない存在。

ただ、『勇者』 レアルードを助け導き、『魔王』を倒すためだけに存在する『シーファ』。

だからこそ、レアルードが『シーファ』に信頼や親しみを抱くのは当然で（だってそうでないと共に旅に出ることはできないから）、だけど『今』のようになることだけはこれまで無かったのに。

いくつもの要因が絡み合って、『今回』のレアルードは『シーファ』に依存してしまった。それは本当は、表に出てこないだけで、『今まで』のレアルードだって似たり寄ったりだったのかもしれないけど。

それでもこんなに早い段階でそれが発露したのは 間違いなく『私』のせいだ。

やっぱり自業自得か、と、諦めの境地で溜息を吐いた。

彼のこと、彼らのこと

「で、アイツの暴走で後回しになってたけど、魔族に会ったって?」

シーファ
私が食事に手を付けたのを見計らって、タキが訪ねてくる。

村でリアルードの戻りを待つ間に、簡単にその辺りのことを説明していたのだ。詳細を話し終える前にリアルードが戻ってきて、その後の怒涛の展開により延ばし延ばしになっていたんだだけ。

「正確には『魔王の眷属』だ」

「それがよく分かんないんだよなー。どう違うワケ?」

「『魔族』とは、魔王によって生み出されたもの。『魔』を内包し、魔王の意のままに動く。『魔王の眷属』は、自らの意思で魔王に下り、印を与えられることで魔王の配下となったもの。忠誠は誓えど、各々の意思によって動くことが多い」

「……つまり、『魔王の眷属』ってのは後天的になるものだってことでもいいか?」

「そう考えてくれて構わない」

『シーファ』の記憶の中では、『魔族』と『魔王の眷属』は明確に分かたれていた。

そもその成り立ちからして魔王に属する『魔族』と、自ら望み、魔王がそれを受け入れることで成り立つ『魔王の眷属』。

『ジラス・アルレイド』はその中でも魔王に近い立場にあつて、かなりのところを己の裁量で動いていた。『シーファ』と顔見知りなのもそれに関係する部分がある。

「へえ……ソイツ、強いんだよな？」

「……そうだな。今回は様子見のようだったから良かったが、真っ向から手を出してきた場合、退けるのは難しいだろう」

「なるほどな……」

私の言葉に何やら考え込むタキをよそに、私は『シーファ』の記憶を探る。

『ジラス・アルレイド』。

褐色の肌に浮かぶ黒色の紋様が、彼が『魔王の眷属』となった証。

琥珀によく似たその瞳が、柔らかく優しく細められたのを見たのは、『シーファ』の記憶でも遠い遠い昔のことだ。

自らの意思で『魔王』に下ることを選んだ、その理由を『シーファ』は知っている。……そして、悔やんでいた。

「まー、とりあえずはレアルードが落ち着くの待つしかないか。今のままじゃロクに動けもしねえしな」

「……すまない」

「アンタが謝ることでもねえだろ。それより、ちょっと質問していい？」

タキの声のトーンが変わって、私は反射的に身構える。……なんかイヤな予感。

無言のまま促すと、タキは油断のならない笑みを浮かべて、言った。

「アンタの異常な回復速度の理由、聞き忘れてたなーって思ってさ」

「……ですよねー。そうきますよね訊いちゃいますよね。」

忘れててくれないかなとか気付かなかったフリしてくれないかなとか思っただけど、そうはいかないよねやっぱり。

「自分自身に魔法が使えないってんなら、アレは魔法によるモノじゃないってことだろ？ だったらなんか他の理由があるんだよね？」

これだからタキと一対一になるのは怖い。ちょっと気を緩めた頃にひょいっと心臓に悪い質問をしてくるから。

「その通りだ。ただ、答えは恐らく君の意には沿わない」

「意に沿わないって?」

「どうということのない理由だ。君の知的好奇心を満たすような答えではない」

「別に好奇心だけで訊いてるんじゃないんだけどな。ま、いいから言ってみろって」

あっさり続きを促してくるタキに内心溜息を吐きつつ、答えることにする。引き延ばす答えでもないし。

「体質だ」

「……………」

呆気にとられたように無言になるタキ。

……………うう、居心地悪い。でも一応本当のことだから仕方ない。だって究極的には体質って言う他ないんだよね、これ。

「……………体質?」

確認するように繰り返したタキに頷けば、彼はどういう表情を浮かべるべきか迷った拳句に失敗したような、微妙な顔になった。

「それで納得すると思ってるワケ？」

「納得してもらうしかない。私には他の答えなど用意できない」

『シーファ』がエルフであることを明かすか否か、悩むところなのは確かだ。

『シーファ』がタキにそれを明かすタイミングは、その時々によって違っていった。旅が中盤に差し掛からないうちに明かすこともあれば、『魔王』と相対する終盤まで明かさないこともあった。

……でも、『シーファ』はあんまり『エルフ』であることを仲間知らせたくないみたいだったから、私もできれば知らせたくない。そういう私の迷いを察したのか、そうじゃないのか。分からないけど、タキはそれ以上の追及は諦めたみたいだった。

助かった……けど、ちょっと違和感を覚える。『シーファ』の記憶にあるより、タキが友好的というかなんというか……。よく考えれば、こうやってレームの町で足止めされてる時点で見切りをつけられてもおかしくないと思うんだけど。

確かに『私』は『シーファ』の記憶の中のタキを知ってるだけで、今回の『タキ』をよく知ってるわけじゃない。だからその思考回路

だって完璧に読めるなんてことはないんだけど、それにしたって違和感は拭えない。

レアルードに引き続いてタキまで変化があるとなると、『シーフア』の自身が『私』だからってだけじゃ説明がつかないような気がするんだけど、どうなんだろう。特にタキはレアルードと違って仲間になるまで私シーフアとは接触が無いわけだし。

……まあ、こうやって考えてても答えが出るわけじゃないんだけど。

レアルードのことはともかく、タキが友好的なのは別に悪いことじゃないし、とりあえず目先の問題をどうにかしないとだよね。

「　　そういえば、ピアはどうしている？」

ふと思いついて訊いてみる。

ピアもまたこの宿の別室に部屋をとって、隙あらばレアルードを部屋に招こうとしていた。毎回断られてるけど諦める様子はない。

怖い思いをしただろうから、精神的ショックとか大丈夫かなと思っただけ、思ったよりタフだったみたいだ。

でも今日はまだレアルードを誘いに来てなかったから、姿を見ていない。だから気になったんだけど。

「レアルードの食事用意したら横からぶんどってって机に並べたから、今頃一緒に食べてるんじゃないかねえの？」

「……そ、そうか」

ぶんどって、って……ある意味すごいよピア。そのバイタリテイに敬服するよ。一応健気って言ってるいいのかなこれ。

ピアがレアルードに気があるっていうのは、もうほとんど確信に近い。

っていつかあれだけあからさまなのに気付かない方がおかしい。現にタキはその辺わかってちよつと面白がってるみたいだし。

……なのにレアルードは相変わらずなんだよねえ……。

鈍すぎて気付いてないのかと思ってたんだけど、もしかしたら単純に興味がないのかもしれないところ最近で思い始めた。あんな可愛い子なものにもったいない、と思うけど、まあ人それぞれだよな。

「ああ、あともう一個訊いときたいことがあったんだけど」

「……何だ」

ちよつと警戒しちゃうのは仕方ない。タキってわりと遠慮なくつこんでくるし。一応空気を読んでもくれる時もあるけど。

「アンタの身体に描かれてるのって、何？」

さらりと言われたその質問の内容に、一瞬思考が止まった。

私の身体に描かれてるもの、って言えば、それが示すのは一つしかない。あの、魔法陣のような黒い文様。

だけど、あれは。

タキの目に映るはずがなかったのに、どうして。

これもまた、『変化』のひとつでも言うのだろうか。でもあれは、その人の『素養』によって見えるか否かが決まる。だから『私』が『シーファ』であることは関係ないはずだ。

考える 否、『思い出せ』。恐らく『シーファ』は知っている。その理由を。

流れの剣士。『証』持ちの双剣使い。稀な赤髪金瞳により、売られた過去を持つ青年。『旅』が進めば『魔法剣士』であることが明かされる人物。

記憶を浚う。改めて認識するとびっくりな知識もあったけど、今求めているのはそれじゃない。

タキの魔法素養は後天的なもの。元々潜在していた『世界干渉力』の代わりに『彼』が与えた

辿り着く。

辿り着いてしまった、その『知識』に、ひゅっと息を呑む。

いきなり顔色を変えた私^{シーファ}を何事かとタキが注視しているのを感じながらも、私は何も反応を返せない。

タキの赤い髪と金色の瞳の組み合わせ。『シーファ』の記憶の中でも一人しか存在しないその理由。

それから、似て非なる組み合わせを持つ、『彼』のこと。その、関係性。

出会った瞬間にその人にまつわる情報を『知識』を余すところなく『思い出せる』なら、こんな驚愕に襲われることなんてなかっただろう。

……ああ、だから。あんなにも『シーファ』は悔やんでいた。

自分の『運命』を知ったことで、彼がその道を選んだからだけじゃなくて。

血を分けた兄弟が、敵対する宿命を負ったことに責任を感じたからこそ、あれほど悔やんだ。

たとえ本人が、それを是としたのだとしても。

一度目の旅。全ての始まりとなったその旅の中では、純粋な後方支援として仲間に加わった『魔法』の使い手。純粋な魔法ではなく、それによく似せた異能を揮う『魔法使い』。

黒によく似た色彩と、その身に宿した異能のために、タキよりも早くに売られていった。正真正銘血を分けた兄なのだ。旅の最中に判明したその人物こそ。

後に自ら望んで『魔王の眷属』となった。『ジマス・アルレイド』だった。

再びの『対話』

「おい、……おい、シーファ？」

軽く肩を揺さぶられ、ハツと我に返る。どうやら茫然自失状態だったらしい。

「やっぱまだ体調戻ってないのか？　それとも、オレが訊いたのってんなマズい事だったか？」

「……………」

問題があるか否かで言えば、特に問題はない。でも、あの黒い文様が見えることの意味を言ってしまうていいのか、私には判断がでない。

これまで『シーファ』が繰り返した旅の中、タキが保持したままだったことは無かった『世界干渉力』。それが、今回に限って残されている、その理由が分からないから。

どうして、と訊ける人はここに居ない。答えられるのはきつと、『ジラス・アルレイド』だけなのに。

「　　いつか、」

気付けば、ぼろりと言葉が口について出ていた。

「いつか、話す。それでは、駄目だろうか」

タキがちょっと驚いたような、意外そうな顔をするのが視界に映る。

ここはさらっと躲すところだったんじゃないかって思っても後の祭りだ。口にした言葉は戻らない。

内心焦っていたら、タキは何だか困ったみたいに小さく溜息を吐いた。

「んな顔して言われて、ダメだとか言ったらオレ冷血人間決定だろ？ ワケありだろーなっつのは分かってるから、アンタがいつて思ったら教えてくれればいいって」

……『んな顔』つて、一体どんな顔してたんだろう、私^{シーファ}。ほとんど無意識だったから分かんないけど、よっぽど哀れっぽい顔だったんだろうか。

「ほら、メシ冷めるし、とりあえず食っちゃえよ。……レアルードに見られながらメシ食つの、イヤだろ？」

その言葉にここ数日で嫌というほど晒されたレアルードの視線を
思い出して、私は慌てて食事の手を早めた。

……いやだつて、ガン見とかいうレベルじゃなく見られながら食
べるのって苦行もいとこるなんだよ！ 味もろくに分からなくな
って砂嚙んでるような気分になるんだよ……！

* * *

食べ終えてタキと話してる時にレアルードが戻ってきて、タキが
うまい具合にレアルードを誘導して四六時中監視状態からは脱却で
きることになって、一安心してベッドに沈み込んで。

……そして今、私は覚えのある場所に居る。場所、と言っていい
ものかどうかはちょっと怪しいけど。

真っ暗で自分の身体も見えない、感覚さえも危うい空間 『シ
ーファ』と言葉を交わした空間に。

「これって、この間の、だよね……？」

呟いた声が『私』のものだったから、それはほぼ確信に変わる。
『シーファ』の声は聞こえない。銀色の文字も見えない。でも、

なんとなく、『居る』んじゃないか 『繋がって』るんじゃないか
かと思った。

「シーファ？ ……聞こえる？」

呼びかければ『シーファ』に聞こえるだろうと殆ど確信してたけど、これで返事がなかったらイタイ人だ。
反応を待つ間が、ものすごく長く感じた。 ……いろんな意味で。

【聞 えて る】

応えがあってほっとする。

……でもやっぱりちよつとホラー風味だ。安定してないってこと
なんだろう。

「聞きたいことがあるんだけど……」

【君が訊 としている事は 見当 ついている】

少しずつ、少しずつ。『シーファ』の声 脳裏に閃く銀色の文字が、明瞭になっていく。

【『ジラス・アルレイド』 それ ら、彼の兄弟 あるタキにつ

いてるさ】

「あと、レアルードについても。ああなっちゃったのって、私のせいなのかな」

傍から見て『異常』に足を踏み入れ始めているレアルードの様子が気になって付け加えると、シーファは言葉に迷うみたいに間を空けて、それから答えた。

【君の抱く疑問の殆どは、究極的にはある一点を説明すれば事足りる。だが、それを君に教えることは、まだ出来ない】

「……どういうこと？」

【それを説明することが、君と、君の周りに危険をもたらす可能性が高いからだ】

『私』が知るだけで、私にも私の周り 多分これはレアルードとかタキとかのことだと思っただけ にも危険をもたらすって…… どういうことなんだろう。

更に疑問は膨らむけど、シーファはそれが答えの代わりだとしても言うように、その内容については触れずに言葉を続ける。

【君には何一つ責はない。レアルードの変化も気にしなくていい。あの状態は長くは続かない】

「じゃあ、元に戻るの？」

【君が言う『元』がどこにあるかに寄るが、少なくとも目的を見失った状態からは脱するだろう】

レアルードの目的っていうと、イコール旅の目的 『魔王』を倒すこと、だよな。

確かに旅の仲間を気遣いすぎて、旅どころか全く移動してないのは『目的を見失った状態』って言えるかもしれない。

【それから、『世界干渉力』をタキが保持したままだったことについてだが、……真意はジアスにしか分からない。ただ】

「……ただ？」

【……ジアスもまた、何かを為そうとしているのかもしれない。私が君を巻き込んだように、タキに『世界干渉力』を残すことによつて】

……『何かを為す』。

『何か』って、なんだろう。タキが『世界干渉力』を持つてるところで起こる変化が、それに影響を与えるんだとしたら。

……。

……うん、駄目だ。さっぱり分からない。そもそも『シーファ』

が分からないことを『私』が分かるはずもない。

思考を打ち切って、シーファに別の話題を向けようとしたところで、『私』を『巻き込んで』、シーファが為したいことが何なのか、知らないことに気付いた。

え、今更？　って自分でも思った。うっかりっていうレベルじゃないよねこれ。ちょっと落ち込む。いやでも状況についていくので精一杯だったし……。

『私』がやること自体は分かってたから深く考えたことなかったけど、そもそも『シーファ』が何を考えてこんなことをしたのか、『記憶』を探ってもよく分からない。

『私』は『シーファ』の状態で『魔王』の元に行く。

それが最終的な目標というか、そのために入れ替わりを行ったのは分かっているんだけど。

それがどういう意味を持つのが、分からない。

「…………あの、シーファ」

【…………？　何だろうか】

「シーファは、何をしたくて、『チェンジリング』の魔法を使ったの？」

とりあえず気になったので、直球で訊いてみる。

『私』と『シーファ』の精神を入れ替える　それを為したのは『チエンジリング』の魔法だ。シーファオリジナルの『魔法』らしい、というのは『記憶』から分かる。

そもそも世界の枠を越える『魔法』っていうのはほぼ無い。そんな事象を起こせる力を持つ人自体が皆無に近いからだ。つまり『シーファ』はレア中のレアみたいな感じ。なんせ唯一のエルフだし。エルフの中でもずば抜けた『世界干渉力』を持ってるらしいし。

姿は見えないけど、シーファが何だか困ってる　緊張してる（？）
（？）みたいなのが伝わってくる。

……そんな難しい質問、してないよね？　それともこれも『説明できない』ことに関わってるんだらうか。

だけど、しばらくの沈黙の後、シーファは一番初めに聞いた、あの悲痛な声を思い出させるような声で、答えた。

【……終わらせたかった、からだ】

【どんな手を使っても、悲願を果たさねばならなかった】

【その結果、君を巻き込むことになってしまったのは、申し訳ないと思っっている】

「あ、いや、別に責めてるわけじゃ……」

なんだかシーファの声音が沈んできたので、慌ててフォローを入

れよつとしたんだけど。

【すまない。 それでも、私は、】

【これ以外に、 けられ を解く 法を、 けられな た】

全部言い切る前に、思い詰めたみたいなシーファの声が閃いて
途切れて、しまった。

……唐突に切れるのは仕様なんだろうか。シーファにもいつ繋がり
が途切れるのかは分からないっぽいけど。別れの挨拶とかこれから
先もできなさそうだ。

またあの血の色の文字が現れるんじゃないかとドキドキしたけど、
今回はシーファの気配はなくなったものの、空間自体はそのままだ
った。別の何かが現れる気配もない。……多分。

それにしても、シーファの答えはどういうことなんだろう。

『終わらせたかった』 これは多分、シーファの『記憶』にあ
る『繰り返し』のことだろう。何度も何度も繰り返し『旅』を終わ
らせたかった、って考えるのが妥当だと思う。

『どんな手を使っても』は、私を巻き込んだことだととして、『悲
願を果たさねばならなかった』って……エルフの悲願、だよな？

『魔王を倒す』ことが、エルフの悲願だったと思うんだけど。

『旅』を終わらせる＝魔王を倒す　だとして、やっぱりなんで『私』が必要だったのかが分からない。その辺りの『記憶』がうまく探れないのは、やっぱりシーファが『隠して』るんだよね。

『魔王』を倒すために『私』が必要なのか、って考えると、答えはN.Oだ。だって『魔王』を倒すために必要なのは、究極的には『シーファ』だけだし、　って、え？

……あれ？　『魔王』を倒す役目を負ってるのってレアルロードじゃないの？

だってレアルロードはいわゆる『勇者』なわけで。『勇者』が『魔王』の元に辿り着けるようにエルフは世界に幾つもの仕掛けをしていったわけ。

……ああ、そっか。『辿り着けるように』なんだ。『倒すために』旅に出るけど、実際倒すのは『シーファ』ってことか……。いや、倒せなかったわけだけ。

そう、『倒せなかった』。その事実は『記憶』にある。でも、そこで何が起こったのか　起こるのは分からない。

ってことは、その『記憶』が私に知られるとマズいってことなんだろう。

それが多分、『説明できない』って言ったことにも関わってる。

……うーん、これって多分深く考えないでいた方がいいんだろうけど、気になるなあ……。

今度『繋がった』ら、こつやっつて考えるのがセーフなのかアウトなのかは訊かないと。

あ、そういえばこの間の最後、何て言ったかも訊いておけばよかった。忠告って言うてたし、確認しておいた方がいいよね。

でもいざ会話するってなると忘れそう。メモ帳とかこの空間に持ち込めればいいのに。

まあ夢(?)だし無理ですよね分かってる。そもそも私が忘れなきやいい話だよね……。

『積みりゆく』『違い』

夢を見た。

『シーファ』と話したあの空間のことじゃなくて、純粋な『夢』。……いやもしかしたら違うかもしれない。『私』が『シーファ』だったけれど、あれは多分 『シーファ』の記憶にある情景を『夢』の形で見ただらう。

暗い 四方が淡く光る石で囲まれた小さな部屋のような場所。中心に祭壇のようなものがあって、その前に立ったシーファの隣には『ジラス』が居た。

いつになく真剣な表情のジラスが、目を合わせないシーファに苛立って、肩を掴んで無理やり向き合わせて、だけどシーファは相変わらずの無表情で、ジラスの苛立ちの理由にも頓着しない様子で、それがますますジラスを苛立たせて、そして諦めさせた。

それは二人が『仲間』だった頃の、記憶の一欠片。

ジラスが『魔王の眷属』ではなかった頃の、『旅』の一部。

* * *

「……本当に、大丈夫か？」

「そう何度も確認しなくても大丈夫だ。レアルードこそ、ピアを頼む」

「まったく、過保護っつーのも飽きたつての。大丈夫だって言うてんだろ？ 念のため回復専門のヤツに診てもらった方が良いつてのはアンタだって納得しただろーが」

「それは、そうだが やっぱり、俺も、」

「付き添いは『教会』に顔の利くタキの方が適任だろう。ピアを一人残すのも問題だし、全員で向かうほどのことでもない。そう長い時間ではないから、待っていてくれ」

「……お前がそう言うなら」

レームの町の『教会』にタキと二人で向かうことになってから、何度も何度も何度も飽きるくらい繰り返し返したやりとりに内心溜息を吐く。飽きるくらいって言うか飽きた。

『教会』には所属の魔法使い 『証』持ちとは別に『教会』そのものに帰属する人が結構いるんだけど、そのうちの回復魔法に精通した人たちはお医者さんみたいなこともしてたりする。私の身体シイファの方はもう全然問題ないんだけど、本当に全く問題ないってことをレアルードに納得してもらうためのデモンストレーションというかそんな感じで、一度『教会』で診てもらうことになったのだ。

一見レアルードが付き添いじゃないと意味がないっばいけど、診断証明書的なものもあるらしいのでそんなことはない。

というわけで、タキと二人、町の中央部にある『教会』へと向か

ったわけだけど。

「……タキ」

「ん？ どうした、疲れたか？」

「いや、それは私の台詞ではないかと思うが。……この町はこんなに治安が悪かったか？」

周囲の惨憺たる有様をあえて見ないようにしつつ訊ねた私に、無謀にも私とタキを捕まえて売り物にしようと近付いてきた集団の最後の一人を容赦なく殴り倒しながら、タキは軽い口調で答えた。

「いいや？ 確かに規模の分だけガラ悪イのも結構いるけど、言うほどじゃなかったハズだぜ？」

「では何故、先程から絡まれ続けているんだろうか。明らかに頻度がおかしいと思うんだが」

今回とった宿は『記憶』にあるよりグレードの高いところで、つまり町の中でも治安の良い区域にあるはずで、ほどよく中心部寄りだ。『教会』までの距離だって格段に短くなっては、だっただけだ。

『教会』への道行の半分もいかない間に、タキが実力モノを言わせて追い払った風体よろしくないオニイサン方の数は、もう両手両足の指じゃきかない数だったりする。

それはもう、角を曲がる度に新手がこんにちはするレベル。このエンカウント率おかしって絶対。

『シーファ』の繰り返しした『旅』の中では、このレームの町は割合長く滞在する場所だった。

だからこそ、大体の治安とかわかってるつもりだったし、何度か『私』が宿から出た時（レアルード付きだったけど）に観察した限りでは、アンダーグラウンドの住人っぽい人はこんなふうじゃうじやいなかった。本当どこから湧いてきたんだろうこの人たち。

「ん……多分アレじゃね？」

「『アレ』とは」

「アンタもオレも、金持ってそうだし高く売れそうだし、一石二鳥の金ヅルに見えんだろ。パツと見あんま強そうにも見えねーだろうし」

……言われてみれば確かに。

私は言わずもがな、カミサマ気合い入れすぎたんですか傑作なんですかな感じの線の細い美形だし、タキも希少な色彩持ちで外見も整ってるってことで売り物にするにはうってつけだろう。

そして私は前衛タイプじゃないから見た目無力っぽいし、タキは一応剣提げてるけどどっちかという細身だ。よくよく観察すると身のこなしが常人じゃないのがわかるけど、それに気付かなければ多人数でかかれれば何とかなると思われても仕方がないのかもしれない。

でもレアルード付きで外出した時はこんなじゃなかったのに……レアルードがどこからどう見ても前衛でガタイもいいから、はからずしも抑止力になったとかそういう感じなんだろうか。あと今回はカモが複数ってことでの相乗効果？

その後もやっぱりどこから湧いてくる裏社会の住人っぽい方々をタキが主に拳で黙らせつつ、なんとか辿り着いた『教会』は、『シーファ』の記憶にある通りの壮麗な建物だった。

派手だとか華美だとかまではいかないけど、明らかに建築の水準が違う。お金と技術がふんだんに使われてるんだらうなって分かるような外観。

『教会』に馴染みのない人ならちよつとばかり踏み入るのに勇気が要るって言うてもおかしくない感じだけど、タキは全く歩みを緩めることなく扉を開いて私を中へと誘う。

……いや、私^{シーファ}だって、『記憶』の上では何度も何度も入ってるわけだし、別にいいんだけど。

ただ、なんか違和感……あ、そっか。

『シーファ』が辿った道筋だと、ここに来るのってタキとじゃなく、レアルードとだからだ。

タキの勧めで幾つか依頼受けて、腕試しとお金貯めるのの一挙にやろうってことになるんだよね。タキは先に『教会』に顔出しに行ってたから、タキがこうして『教会』の外で待ってくれてるの見るのが初めてなんだ。

タキの勧めで『教会』を訪れるっていうのはどの『旅』でも同じみたいだから、不可避イベントの一種なんだろうけど……装備とか

整えるためのお金稼ぐのと経験値的なもの稼ぐのと、他に何かこじやないとダメな理由あったよね。

頑張れ私思い出せ私、絶対なんか重要イベントだったはずだから……！　せめて心の準備してから入りたい。場当たりに『記憶』思い出すのは勘弁……！

「入り口で立ち止まって、どうかされましたか？　……って、タキ？」

涼やかな声が屋内から聞こえて、それから少しだけ驚いた風にタキの名を呼んで。

そして私は『思い出す』。

いつも笑みを絶やさない、穏やかな『彼』のことを。

「……『シユウ』」

浮かぶ名前、穏やかな笑顔。少し真面目が過ぎて、軽いノリのタキとはよく口論していた。でも仲が悪いつてわけじゃなくて、むしろ昔からの知り合いだから遠慮なく言い合いができていたのだと知っている。

『シユウ』　シウメリク。

『教会』所属の魔法使い。『使徒』。

知っている。知っている。知っている。

だけどその『記憶』とはある一点が決定的に違うのだと、声を聴いた瞬間から『私』は気付いてしまっていた。そしてそれは、続くタキの言葉で疑いようもないものになる。

「 シウメイリアか。久しぶりだなー」

「それはこちらの台詞です。貴方はいつもあちこちふらふらしているから所在が把握しにくいと、主様が困っていらっしやいました」

「そりゃ、オレは別にただの旅人だしー？ いつでも『教会』に所在把握されてるなんて気色悪い状態はごめん被るな」

「あれだけ主様に目を掛けられていながら、そんな台詞が出てくるだなんて……」

「ご期待に沿えず悪うございましたね、『使徒』サマ？ 光荣デス、とでも言っときゃ満足だったか？」

「また貴方は、そんなふざけた物言いをして。そんなだから、他の『使徒』にやっかまれるんですよ」

いつか『シーファ』の聞いた二人の遣り取りと内容は変わらない、だけど片割れの『声』が違う。

『シウメイリア』。
知っていて、知らない人。

『シーファ』の知る『シユウ』 『シウメリク』の、死んだ双子の妹だったはずの『シウメイリア』がそこに居た。

ああ、そうか。

『シウメリク』は『シウメイリア』を救えなかったのを悔やんだ。彼女に降りかかった運命を自分が肩代わりできていたらと、願うみたいに思い続けてた。

……それが、きつと、叶ったから。

ここに『シウメリク』はいなくて、『シウメイリア』がいて、そして『シウメリク』と同じ立ち位置で生きている。

どうして『今回』こうなったのかは、『私』には分からない。

『私』が『シーファ』であることで影響を受けるのは、あの『はじまりの日』以降の出来事のはずなのに。

『私』が在ることとは関係なしに、『記憶』とのズレが増えていく。

これは、『シーファ』も予測していたことなのか、それとも予測していなかったことなのか。

『記憶』の中にも『知識』にも答えはない。もしかしたら答えを知っているかもしれない『シーファ』も『ジラス・アルレイド』もここにはいない。

ただ、無性に。

泣きたいような、寂しいような、それでも祝福するような気持ちになったのは。

『シーファ』の記憶があるからなんだろうと、そう、思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5674w/>

異世界チェンジリング

2011年10月30日00時06分発行